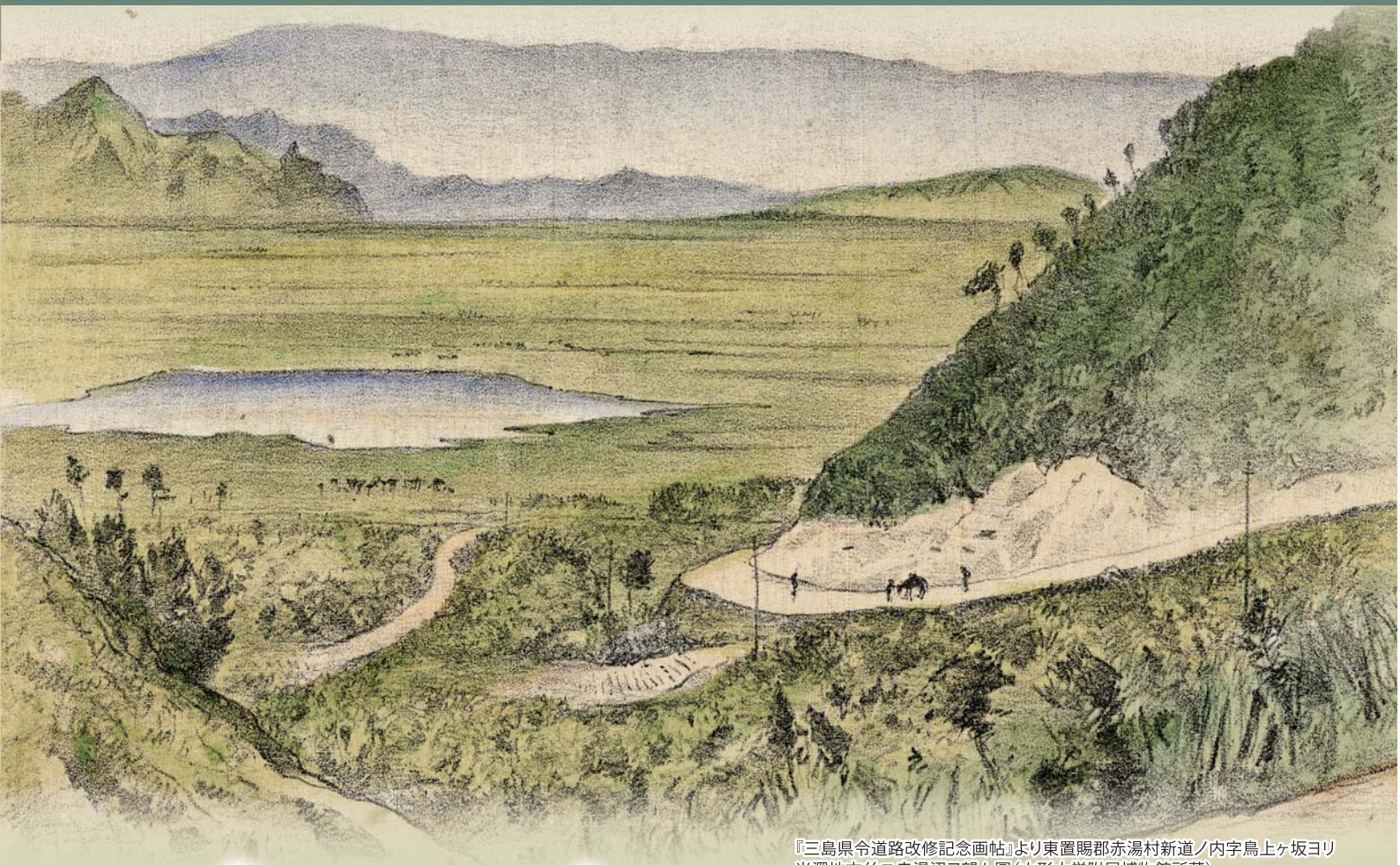
とうほく街道会議第14回交流会 山形大会



『三島県令道路改修記念画帖』より東置賜郡赤湯村新道ノ内字鳥上ヶ坂ヨリ米澤地方幷ニ赤湯沼ヲ望ム圖（山形大学附属博物館所蔵）

とうほく街道会議

報告書

イザベラ・バード来日140年
～アルカディア街道から南へ・北へ地域を繋ぐ～

とき 平成30年11月9日(金)～10日(土)

ところ 山形テルサ　〒990-0828 山形市双葉町1-2-3　TEL.023-646-6677

主催： とうほく街道会議 山形大会実行委員会

とうほく街道会議、アルカディア街道IB倶楽部、城下町やまがた探険隊、越後米沢街道・十三峠交流会、つるおかルネサンスの会
山形大学地域教育文化学部、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所・東北運輸局山形運輸支局、山形県、山形市、真室川町、金山町
新庄市、舟形町、尾花沢市、村山市、東根市、天童市、上山市、南陽市、川西町、飯豊町、小国町、山形県観光物産協会、山形市観光協会

共催： 羽州街道交流会

協賛： (一社)東北地域づくり協会（みちのく国づくり支援事業）、東北文教大学、山形県民共済生活協同組合、山形建設(株)

協力： 街道観光推進会議、山形大学附属博物館、NPO法人全国街道交流会議、(一財)日本みち研究所

後援： 駐日英国大使館、出羽の古道六十里越街道会議、あおもりかいどう会議、NPO法人あきた地域資源ネットワーク、みやぎ街道交流会
ふくしまけん街道交流会、NPO法人東北みち会議、(株)ハイジアパーク南陽、山形県教育委員会、山形市教育委員会、山形商工会議所
山形コンベンションビューロー、山形新聞・山形放送、朝日新聞山形総局、毎日新聞山形支局、読売新聞山形支局、河北新報社
NHK山形放送局、(株)山形テレビ、(株)テレビユー山形、(株)さくらんぼテレビジョン、(株)ダイバーシティメディア

広告協力： 山形新聞社、山形県民共済生活協同組合、山形建設(株)、山形銀行、(株)千歳建設、(医)菅野内科医院、伊藤公認会計士事務所
山形教育用品(株)、きらやか銀行、東北文教大学、(株)天童木工、(株)でん六、荘内銀行、(株)大風印刷、gattahouse（大風印刷）
(株)チェリーランドさがえ、川西町浴浴センターまどか、(株)グリーンバレー神室振興公社、(株)もがみ物産協会、東北電化工業(株)

とうほく街道会議 山形大会実行委員会事務局

大会開催趣意

日光金谷ホテル所蔵

イザベラ・バードは、明治11年（1878）に来日し、数ヶ月に及んだ横浜から東北・北海道の旅を『Unbeaten Tracks in Japan』（邦訳本：『日本奥地紀行』）として著しました。

この書は、世界を旅している女性探検家としてのバードの鋭い観察眼と優れた表現力で、明治初期の自然・人々の生活・社会の様子などを詳細に著した一級の歴史書とも言えるものです。

この書から、今は失われ、または失われつつある日本の人々の心や暮らしを学び、残された風景や歴史などの地域資産を再認識し、守り、次世代に繋げることは、大変に意義あるものと思います。

平成30年は、イザベラ・バード来日140年となることから、これを契機に多くの方々が『日本奥地紀行』から地域の魅力を再認識し、誇りにするとともに、山形県内各地の活動や地域資源のネットワーク化を目的として、記念大会を開催するものです。

そして、東北の関連団体などの支援を得ながら、バードの足跡に沿って、山形県内だけではなく、東北や東北から更に南北に活動のネットワークを広げたいと思います。

『日本奥地紀行』の原書　ハイジア・パーク南陽
イザベラ・バード記念コーナー所蔵

イザベラ・バードとはどのような女性だったのか

若いころは病弱だったバード

1831年（天保2）、イギリスのヨークシャーのバラブリッジで、英国国教会牧師の長女として生まれたイザベラ・ルーシー・バードは、幼いころから病弱だった。脊椎の持病に悩まされ、転地療養や船旅が体にいいと医師に勧められて、23歳のときにアメリカとカナダに旅行し、処女作『英国女性のアメリカ紀行』を出版した。

旅への意欲は40歳のころから本格的なものになり、世界各地、それも多くは辺境の地を巡る旅をつづけ、成果を旅行記という形で発表した。なかでも『Unbeaten Tracks in Japan』はイギリスでロングセラーとなり、何度も版を重ねた。

ヴィクトリア朝レディ・トラベラーの筆頭

バードが活躍した時代、イギリスはアフリカや南米、中央アジアなどへの探検熱が盛んだった。英国王立地理学会がその中心だったが、女性は会員になることはできなかった。しかし、バードは王立スコットランド地理学会の特別会員に迎えられ、その業績は高い評価を受けていて、その後、英国の学会もバードを特別会員として受け入れ、その4か月後にはさらに15人のレディ・トラベラーが選出された。バードは女性として、イギリスにおけるトップレディ・トラベラーとして認められたのだ。

『日本奥地紀行』の旅 —— 日本の秘境を辿る

1878年、サンフランシスコから太平洋を渡り、5月20日に上海経由で横浜港に着岸したバードは、イトーという通訳を雇い、イギリス公使館と明治政府の計らいで特別旅券を確保し、最小限の旅荷物を調達して東京を出発した。その行程を簡略に示すと、東京～日光～会津～新潟～山形～秋田～青森～北海道となる。

バードの旅の目的は、日本の奥地の人々の生活を見分し、最終目的地の北海道でアイヌの人たちの生活に触れることだった。その後、神戸や京都、伊勢など西日本を旅した。

バードの旅の目的とは？

バードの言葉を借りると、「1,400マイル（約2,250キロ）以上にわたる陸路の旅」となる。そのルートとして、よく知られた道を外したコースをあえて選び、人力車、牛や馬、徒歩、川舟などを使い、「私は日本人の生活の中ですごし、ヨーロッパ人の影響を受けていない地域の、日本人の暮らしを見たかった」と記している。バードはこのような旅の仕方を、世界各地で実行している。これこそがバードの旅の真骨頂だった。

バードが冒険的な旅行をした国々

西暦（年）	年齢（歳）	旅した国名	旅行記名（出版年）
1854	23	カナダ、北アメリカ東岸	『英国女性のアメリカ紀行』1856
1857	25~26	北アメリカ	『アメリカの宗教事情』1859
1866	35	カナダ	
1872	40~41	オーストラリア	
1873	42	ニュージーランド、ハワイ 北アメリカ・ロッキー山脈	『サンドイッチ諸島での半年』1875 『ロッキー山脈生活記』1879
1878	46	日本	『日本奥地紀行』1880
1879	47	マレー半島	『黄金の半島』1883
1889	57	インド、カシミール、チベット	
1890	58	ペルシャ、アルメニア オスマントルコ	『ペルシャとクルディスタン』1891
1894	62~63	日本、朝鮮、中国、ロシア	『朝鮮とその近隣諸国』1898
1895	63~64	上海、中国、日本、朝鮮	
1896	64~65	朝鮮、揚子江流域、	『揚子江渓谷とその奥地』1899
1901	70	モロッコ	

とうほく街道会議

とうほく街道会議第14回交流会 山形大会

イザベラ・バード来日140年
～アルカディア街道から南へ・北へ地域を繋ぐ～

11月9日（金） 全体会、ネットワーク設立宣言、分科会（3分科会）、パネル展、街道談義ほか

【第一部 フオーラム】 13:00～17:30（参加費無料）

（開会前）DVD上映 「イザベラ・バードの歩いたみち－日本奥地紀行 山形路－」（制作：つるおかルネサンスの会）

◆ 開会行事 13:00～13:55 会場：山形テルサ・テルサホール

- ・オープニング 『日本奥地紀行』朗読 國井美保氏、本間尚子氏（つるおかルネサンスの会）
- ・主催者挨拶 山形大会実行委員会委員長 結城 章夫、とうほく街道会議会長 宮原 育子
- ・開催市挨拶 山形市長 佐藤 孝弘氏
- ・来賓挨拶 山形県知事 吉村 美栄子氏（代読：観光文化スポーツ部長）、国土交通省東北地方整備局道路部長 阿部 悟氏

◆全体会（基調鼎談） 14:00 ～15:30 会場：山形テルサ・テルサホール

「イザベラ・バードと『日本奥地紀行』の魅力」

中村 英夫氏（東京都市大学名誉総長）
舩山 龍二氏（JTB相談役／山形市出身）
渋谷 光夫氏（アルカディア街道IB倶楽部会長・東北文教大学客員教授）〔進行役〕

◆イザベラ・バードに関する交流・連携ネットワークの設立宣言

15:35 ～15:45 会場：山形テルサ・テルサホール

［休憩／第2・3分科会の会場へ移動］

◆分科会 16:00 ～17:30

〈第1分科会〉「アルカディア街道を活かした地域づくりと観光」 会場：山形テルサ・テルサホール

コーディネーター：宮原 育子氏（宮城学院女子大学現代ビジネス学部長）
パ ネ ラ ー：申橋 弘之氏（金谷エンタープライズ(株)代表取締役・金谷ホテル創業者の孫／日光市）
古賀 方子氏（全国街道交流会議専務理事／福岡市）
西田 徹氏（金山町景観政策推進員／山形県）
アドバイザー：和田 賢哉氏（山形河川国道事務所長）

〈第2分科会〉「『日本奥地紀行』の描写と魅力」 会場：山形テルサ3F・アプローズA

コーディネーター：藤田 洋治氏（山形大学地域教育文化学部教授）
パ ネ ラ ー：秋山 秀一氏（旅行作家／千葉県鎌ヶ谷市）
立松 和宏氏（『日本奥地紀行』の旅・研究会／千葉県浦安市）
錦 啓氏（元山形県博物館館長／南陽市）

〈第3分科会〉「バードの足跡から見る地域景観」 会場：山形テルサ3F・アプローズB

コーディネーター：大友 幸子氏（山形大学地域教育文化学部教授）
パ ネ ラ ー：川上 健氏（阿賀町観光ガイド／新潟県）
八木 浩司氏（山形大学地域教育文化学部教授）
金子 正美氏（イザベラバードの道を辿る会会長／北海道）

◆その他

活動団体等紹介 パネル展 山形県内物産展示・販売 「チェリーランド さがえ」

12:00～17:30 会場：山形テルサ・テルサホール ホワイエ

【第二部 街道談義】 18:30～20:30 会場：国際ホテル6F・スプレンダー

地元の食材・料理、東北各地の地酒で交流を深めました。 【参加費】4,000円

11月10日（土） アルカディア街道探訪会

A【黒沢峠コース】 B【赤湯～上山コース】 C【山形街歩きコース】 D【天童～舟形コース】 E【新庄～真室川コース】

主催者あいさつ

実行委員長　結城 章夫

本日は、多くの皆様にご参加をいただきまして、ありがとうございます。

英国の女性探検家であるイザベラ・バードは、今から140年前の明治11年（1878年）に来日し、横浜から東北・北海道を旅行し、『Unbeaten Tracks in Japan』（邦訳本『日本奥地紀行』）を著しました。

この書は、バードの鋭い観察眼と、温かい友愛の心、そして優れた表現力で、明治初期の日本の自然、人々の生活、社会の様子などを詳細に記述した第一級の歴史書であります。

今、山形県内の各地では、この書から、今は失われ、あるいは失われつつある日本の人々の心や暮らしを学び、今に残された風景や歴史などの地域資産を再認識し、山形の魅力を再発見していく活動が活発に行われています。

実行委員会の私たちは、今回の山形大会の開催を契機にして、「日本奥地紀行」から多くの方々がこの地域の魅力を再認識し、それを誇りにしていただきたいと願っています。そして、今県内各地でばらばらに進められている活動や、県内あちらこちらに散在している地域資源をネットワーク化していくことを目指しています。

さらには、このネットワークの繋がりを山形県に止まらず、関係団体などのご支援を得ながらバードの足跡に沿って、東北へ、さらには東北からさらに南・北にもこの活動のネットワークを広げていきたいと考えています。

本日のこの山形大会が、イザベラ・バードにちなんだ山形県内・外の諸活動の連携・強化につながるとともに、本日ご参加いただいた皆様にとりまして有意義で、また楽しいイベントとなりますことを心から祈念いたしております。

最後になりますが、本大会の開催に力強いご支援をいただきました山形県、県内関係市町村の行政当局及び山形大学の関係の皆様、そして「アルカディア街道ＩＢ倶楽部」をはじめとする多くの市民団体・市民ボランティアの皆様に心から感謝を申し上げまして、実行委員会委員長のご挨拶とさせていただきます。

とうほく街道会議会長あいさつ（要旨）

会長　宮原 育子氏

とうほく街道会議は、平成16年10月に山形県上山市で開催された第3回全国街道交流会議羽州街道上山大会での宣言を基に、平成17年3月に設立いたしました。

以来、東北の街道に関する研究会や交流会のプラットフォームとして、毎年東北各地を会場として交流会を開催しています。山形県内では、平成22年に第6回大会を西川町で、平成28年第12回を川西町で開催をいたしました。

そして、今回の第14回をイザベラ・バード来日140年記念大会として、『日本奥地紀行』を最初に日本に紹介した高梨健吉先生の生誕の地である“アジアのアルカディア”〔山形〕で開催出来ることは大変意義深いことだと思っています。

この大会を契機に、明治時代に歩いた女性の足跡を、新しい時代に改めて活かしていくということも是非考えていけたらと思っております。

また、最近は、外国の方の来訪も東北で増えております。そういう観光の中で、この街道の交流を考えていくこともとても重要であると思っています。

開催地の歓迎あいさつ（要旨）

山形市長　佐藤 孝弘氏

本大会に各地よりお越しくださいました皆様を心から歓迎申し上げたいと思います。

イザベラ・バードを読むと、単に客観的な記述が続くということでなく、本人の不満や愚痴とかが非常に率直に語られているというところと、そういう本音の部分からも当時の日本がどんな状況だったのかということも見えてくることが面白いなと思っております。

それから、道路がもたらす経済効果みたいなことをバードは書いており、これも非常に透徹した面をもっているなと思いました。今年度に米沢から山形までの東北中央道が繋がることから、これを地域の発展に繋げていくということも非常に大切なことと思っております。

この大会は、山形市にとってもこの地域の歴史や、あるいは山形の持ついろいろな資源を再認識させていただく非常に有意義な大会だと思っています。

今日をきっかけに、それぞれの地域がイザベラ・バードの足跡を学ぶということによって、さらに地域の良さを見直す機会になればと思っております。

来賓あいさつ（要旨）

山形県知事　吉村 美栄子氏

（代読）観光文化スポーツ部長
武田 啓子氏

山形県は、イザベラ・バードが東洋のアルカディアと讃えたところであります。

世界に誇る美食・美酒をはじめ、泉質や効能、湯ざわりが異なる多種多様な温泉、各地に残るふるさとの原風景や歴史、精神文化などの魅力的な観光資源を発信し、交流人口の拡大を図っているところであります。

国土交通省東北地方整備局
道路部長　阿部 悟氏

歴史的な街道をテーマとした街道会議のさまざまな人づくり・まちづくり活動において、古き時代から現在まで歴史的な変遷を振り返るとともに、東北地方の歴史から見た今後のみちづくりのあり方や街道を利活用した新たな観光振興等に資する活動として大きな期待が寄せられております。

「イザベラ・バードのみち交流連携ネットワーク」の設立

今大会の開催趣意を受けて、関連4団体を設立発起団体として、下記のとおり大会において発足しました。
今後、関係する行政機関や活動団体等に参画を呼び掛けて行くこととしています。

「イザベラ・バードのみち交流連携ネットワーク」設立宣言

英国生まれの探検家イザベラ・バードは、明治11年（1878）に来日し、横浜・東京から日光～会津～新潟～山形～秋田～青森～北海道への数ヶ月に及んだ旅を『Unbeaten Tracks in Japan』（邦訳本：『日本奥地紀行』）として著しました。

日本を著した優れた旅行記は多くありますが、この旅行記は、世界を旅している女性探検家のバードの友愛の心、鋭い観察眼と優れた表現力で、近世が色濃く残る明治初期における各地の自然・人々の生活・社会の様子などを詳細に著した一級の歴史書とも言えるものです。

この旅行記から私たちが、今は失われ、または失われつつある日本の人々の心や暮らしを学び、残された風景や歴史などの地域資産を再認識し、守り、次世代に繋げることは、大変に意義あるものと思います。

また、今求められる地方創生には、地域の多くの方々が『日本奥地紀行』から地域の魅力を再認識し、誇りにするとともに、他地域から学び、ともに歩むため各地の活動や地域資源をネットワーク化することが重要です。

この旅行記を最初に日本に紹介した高梨健吉先生の生誕の地であるアジアのアルカディア（山形）で開催された「イザベラ・バード来日140年記念 とうほく街道会議山形大会」において、「イザベラ・バードのみち交流連携ネットワーク」の設立を宣言し、志をともにする各地の人々の参加を呼びかけます。

一、イザベラ・バードや『日本奥地紀行』より地域を深く学び、多くの方々にも伝えよう。
一、自らの歴史、文化などの風土に誇りを持ち、磨き・育てて、次世代に伝えて行こう。
一、イザベラ・バードの歩いたみちを結び、美しく・しなやかな、個性ある地域づくりをはじめよう。
一、イザベラ・バードの歩いた豊かなみちを守り育てながら楽しもう。
一、今日ここに集う人々とともに、歴史を背負い未来に繋ぐ大きな一歩を記そう。

平成30年11月 9日
イザベラ・バード来日140年記念 とうほく街道会議 山形大会にてここに宣言する。

宣誓を読み上げるLisa Somers（リサ・ソマーズ）さんと設立発起団体代表

［設立発起団体］

アルカディア街道 IB 倶楽部
とうほく街道会議
特定非営利活動法人 全国街道交流会議
一般財団法人 日本みち研究所

写真左から／リサ・ソマーズさん、NPO法人全国街道交流会議 藤本貴也代表理事、とうほく街道会議 宮原育子会長
アルカディア街道IB倶楽部 渋谷光夫会長、(一財)日本みち研究所 川瀧弘之専務理事

「イザベラ・バードと『日本奥地紀行』の魅力」

バードの『日本奥地紀行』は各方面から再評価されており、「旅の達人・慈愛の国際人」であるバードの魅力を探り、またバードの歩いた各地の地域資源の活かし方や地域間の交流・連携について考えました。

鼎談者　**中村 英夫 氏**（東京都市大学名誉総長）　**舩山 龍二 氏**（JTB 相談役／山形市出身）　**渋谷 光夫 氏**（アルカディア街道 IB 倶楽部会長・東北文教大学客員教授）〔進行役〕

渋谷光夫氏（以下**渋谷**）　今日は、三つのテーマで、バードと『日本奥地紀行』を考えていきます。

最初に、自己紹介とバードや山形との関わりからお願いします。

バードや山形との関わり

中村英夫氏（以下**中村**）　30年前に置賜地域高規格道路整備委員会、その後仙台と新潟を結ぶ地域高規格道路計画の委員会の委員もやり、この道路をどのように計画しどのように活かすかについて、意見を述べさせていただく機会がありました。

その委員会で、バードが残してくれた足跡を活用して、地域にいろいろな形で活かす「イザベラ・バードの街道」の話をしましたが、それが今日の「アルカディア街道」になったと思います。

バードは書の中で「良い道路は日本が何よりも切実に必要とするものです。内陸に物資を輸送できるまずまずの道路をつくるというような、十分に元の取れる事業に政府が出資して国を豊かにするのは、イギリスで帆船を買ったり、高価な洋風のつまらないランチするよりはるかに良いことでしょう」と記しています。もっと道路整備すべきだというわけです。

山形県は三方を山に囲まれ、道路に大変苦労してきた地域です。そこにバードが回り道をしてくれたのは、何かの縁でそうなったのだと思います。

舩山龍二氏（以下**舩山**）　私は50年以上観光の仕事をやってきました。今一番嬉しいことは、去年インバウンドは2400万人以上来日し、その消費額が4.4兆円（輸出でカウント）となったことです。日本の輸出はトップが自動車で、次が化学、そしてインバウンドの順となり、観光が大きな産業に成長しています。

バードに関してですが、140年前の日本の姿、特に山形の姿を鮮明に描写しています。バードの表現が素晴らしいのは、本来の意味の「観光」をして山形の光を観たからだと思っています。

私も３年前、小松から金山までの街道を旅行しました。バードの観た美しい街と農村風景、温泉地を回りましたが、学びながら街道を歩くということは、大変意義深いことだと思います。

バードと『日本奥地紀行』の魅力

渋谷　最初のテーマについて、考えていきます。

〈パワーポイント（以下PPT）説明：バードの世界旅行地図、顔写真、奥地紀行の行程地図、奥地紀行の翻訳書（簡略・完訳版）等〉

黒沢峠の石敷き道

バードが日本に来たのは46歳の時（1878年）でした。『日本奥地紀行』を最初（1973年）に翻訳したのは山形県川西町出身の高梨健吉先生で簡略版でした。その後、時岡敬子氏や金坂清則氏などの完訳本の出版、解説書や歴史書、雑誌、小説やコミックなど多種多様な視点から、バードは取り上げられています。

では、バートの魅力をどのように考えているかをお聞きします。

舩山　私は1962年にJTBに入り、インバウンドを担当しました。当時は、ほとんど欧米からのお客さんでした。船で横浜にきて、神戸・長崎へ行くというのが主でした。その旅行の際、必ず訪ねるべきところは、瀬戸内海と日光金谷ホテルでした。

その旅行において大きな影響を与えたのは、トーマス・クックという近代的なイギリスの旅行会社でした。明治４年にクック社が世界一周旅行で日本に来た時に、瀬戸内海を見て景色を絶賛したためです。日光はバードの力です。バードは日光に９日間と長い滞在をしましたが、その後、日本に来た２度とも日光に行きその素晴らしさを紹介しました。長年、日光は欧米人の心を捉えていたのです。

バードは山形の人々と景観を特筆しています。人々の心は現在の山形県観光業界の卓越したホスピタリィ精神に脈々と繋がっているのです。

また、バードの見た景観というのは非常に素晴らしいと先ほどから言われておりますが、景観のベースは農業です。自然と人々の生活や暮らしが調和されている景色はまさに山形の大変な財産であると思います。

これら遺産・共有財産は今後も地域の人々がみんなで理解し愛着と誇りをもって大切にしなければならないと思います。

渋谷　街道沿いの景観は、金山町が脚光を浴びていますが、天童の街なども綺麗になっています。

中村　イギリスはバードの時代のころ、グランドツアーと言って、貴族や金持ち階級は、何カ月もヨーロッパ大陸を旅行しました。フランスやイタリアの古典的な文明の地へ行くという旅行です。

レディトラベラー、女性の旅行も18世紀からあり、シリア・ファインズという女性、バードより100年前にイギリス国内を旅行して本を著しています。道が悪いとか、宿屋が汚くて不潔であるとか苦情を書いています。

バードも日本について同じようなことを書いていますが、当

時のイギリス以上に東北の地というのは問題が多かったと思います。

しかし、バードは言葉や食べ物の問題、しかも大きな山脈の急な峠道を越えて歩かなければいけないところを、何ヶ月にもわたって旅をするため、大変な気力と体力を持った女性でした。本の内容も、植物の生態学的な話、あるいは経済問題や社会学的な話と実に豊富に、しかもをきめ細かく書いています。そういう大変な女性が当時イギリスにいて、しかも日本、山形県へ来たということに驚くわけです。

彼女は旅に大変苦労し、特に道路が悪いことに困り果てます。ヨーロッパでは、ローマ帝国の時代から馬車で走るための道を造っています。しかし、日本は基本的に人が歩く道でした。バードが来た頃、山形県令三島通庸は、万世大路をはじめとした馬車の道路を造っていきます。道路に関して山形はその後も苦労して、今は高速道路をやっているわけです。

しかし、今は道路整備をするだけでなく、それを活用する時代に入っていて、一番重要で可能性の高い事業は、観光事業です。その意味でバードの道と地域振興というのは、時期にかなったテーマだと思っています。

渋谷　今月末には、国・県・市町などが中心となって東北中央道による地域活性化シンポジウムも開かれます。その副題は「バードが見た街道から高速道路新時代へ」です。

私にとってバードの魅力は二つあります。一つは旅の達人であったこと。通訳1人、食料と荷物は最小限で、食事は現地調達。そして現地の習慣・慣習を尊重する旅の達人だということです。

二つ目は慈愛の精神を持った国際人であったことです。例えば、泊まった部屋は障子や襖でプライバシーも何もない。病人や怪我人にも優しく対応する。アイヌ人に対しても丁寧に接しているなどです。

地域資源の活かし方

渋谷　バードがたどった道の地域資源として、当時の街道や自然景観、日光の金谷侍屋敷などが残っているほか、山形では高橋由一の絵画や長谷川竹葉の錦絵で当時の様子と現在を比較出来ます。

鳥上坂からの眺望

〈PPT説明：バードが辿った地域資源、山形県内の足跡図と天気、高橋由一の絵画と長谷川竹葉の錦絵等〉

中村先生は、ヨーロッパ生活が長いそうですが、ドイツのロマンティック街道を紹介してください。

中村　ロマンティク街道は1950年頃から始まりました。約400kmの道路沿いの建物や文化財を見ながら旅が出来ると宣伝をしました。初めの頃はドイツとアメリカからのツアー客が来る程度でしたが、JTBなどの努力からか、日本からも多く行くようになりました。

その後、ドイツではメルヘン街道、ゲーテ街道など同様な街道を創りました。ドイツ人やイギリス人は文化財や史跡などを訪ねることに大きな関心を示します。それは日本人も同じで、文学作品に出てくるものにも大変興味を示します。

私は、バードを評価する大きな点は、当時の地方の庶民生活を、フェアな形で書いてくれたことです。シーボルト、アーネスト・サトウなどが日本のことを書いていますが、ほとんど江戸や京都、東海道筋です。

バードは日本人の良いところをたくさん書きましたが、まずい部分も指摘しています。それは今見ても納得できるものが多いです。

バードは、現在の日本の人口減少と高齢化の進展で、寂しくなっていく山村部などの地域振興に、もっと私の仕事を使いなさいと思っていることでしょう。彼女の書いた情景と今を比べると、自然は同じだけど人々の暮らしは全く違っています。良くなっているもの、そうでないもの双方があります。

それをイギリス人やいろいろな国の人にもぜひ見てほしい。我々の140年前というのはこうで、いまはこの様になっていると参考にしてほしいと思います。

「山形県新築の図」（長谷川竹葉筆・明治 14 年頃）

舩山　ドイツは戦後復興のために各地域で観光の街道を作りましたが、その一つがロマンティック街道です。素晴らしいルート観光商品ですが、どんな良い商品でも売るための必要条件に過ぎません。これを売れる様にするための十分条件は宣伝・販売促進をすることです。ドイツ政府観光局が、50くらいある街道の中から五つぐらいに絞って、日本の旅行会社に売り込んできました。各旅行会社が一斉に商品化し、「アンノン誌」などで集中的に宣伝して売り出しました。やはりプロモーション活動が伴わなければなりません。

皆さんは頑張っていると思いますが、バードに関するたくさんの素材をまだ生かし切れていない。ではどうするか。日本人の旅行形態は、一言でいえば大変忙しい周遊型旅行です。

今後は旅行に膨らみを持たせることです。わが社に「るるぶ」という雑誌がありますが、「見る・食べる・遊ぶ」の語尾を取ったものです。これからは、「体験する・交流する・学ぶ」という「新しいるるぶ」に替えなければなりません。例えば和服を着て花火や花見を楽しむなど体験をして、若干学びもすることです。そのためには忙しい周遊型旅行を滞在型旅行にしていくということが最大の課題です。

今、国をあげてインバウンドに取り組んでいますが、依然として国内旅行の85％は日本人の旅です。滞在して、さまざまな時間消費型メニューを利用すること、その中でバードの素材が活かされていくと思います。

日光～軽井沢～上田までの「日本ロマンティック街道」や関西の「歴史街道」がありますが、残念ながらテーマに適うルート観光商品になっていません。

ドイツのロマンティック街道は50年もかけて、一つのテーマに基づいて、街なみ整備、シンボルマークや案内書を作るなどしてブランド化・商品化し、時間をかけて創っています。

山形県は次の新しい観光計画の検討が始まりました。この計画には、観光業界だけではなく、全県民、全産業が参加しないといけません。観光があまねく理解されるためには子どもたちにも地元の観光を教える必要があります。学習指導要領に

は一切ありせんが「観光立国推進法」の中では明記されています。既に一部の県では観光副読本を作っている例がありますので、今後、観光計画の委員として検討していきたいと思います。

中村　イギリス人やドイツ人、フランス人などの日本滞在は、７日以上が９割を超え、滞在しての体験観光が多い。東北ではインバウンドはまだ少ないが、ほとんど宣伝がされていません。

長野県の「信越トレイル」や、広島県・愛媛県の「しまなみ海道」は情報発信が盛んで、トレッキングやサイクリングを楽しむために世界中から来ています。今はインターネットで情報発信が容易な時代です。

渋谷　私は数年前、新潟から金山まで東京の観光業者からの依頼で、バードの旅をコーディネートしました。その時、山形県内には温泉地がたくさんあるのに、宿は2泊ともホテルでした。担当者にどうしてかと聞くと、温泉旅館泊まりでは人が集まらないと言うのです。参加者に聞いたら、知らない人との相部屋ではどうも……と、旅行形態が変わって来ています。また泊食分離も考える必要があると思います。

舩山　その通りだと思います。日本人は、滞在型旅行を苦手だと思っていますが、実は海外で滞在する日本人はシルバー層を中心に年間150万人もいます。マレーシア、タイ、ハワイ、オーストラリアの順で人気があり、１カ月位滞在して15～20万円と安く年金で賄えます。ゴルフやサイクリング、水泳などのメニューがあり、宿はコンドミニアムなど施設が充実しており、基本は泊食分離です。

最近、ロングステイ財団では海外から国内への新たな動きを始めています。人気は北海道と沖縄が群を抜いておりますが、やがて日本全体に広がるでしょう。このためには、地域全体でお客様をもてなすシステムづくりが重要です。インバウンドはこのシステムにいい刺激を与えています。ニセコや野沢温泉、白馬はほとんど１週間以上の滞在です。滞在型旅行が定着することでバードの資源が活きてくると思います。

中村　街道観光をやっていくインフラは随分出来ています。道の駅は山形県内にもたくさんありますが、そこの取り組みにバードの話はありません。道の駅でもっと活用すべきです。道の駅を最初に考えた時、地元の産品を売るほか、地域の文化的なものを旅行者に知ってもらうという機能も考えたのですが、あまりやられていません。しかし、バードの話はとても良いと思います。是非取り組んで欲しいです。

地域間の交流と連携の在り方

渋谷　三つ目のテーマに入ります。各地でバードに関する活動は見られます。今大会はアルカディア街道として、山形県や市・町をはじめ、関連団体との連携で開催できました。これをさらに、点から線・面へ拡げていくことが重要であり、今後の課題です。

そこで各地域ならではの資源と結びつけたストーリー性、シナリオづくりが重要です。今大会を契機に、バードの道を南北へ繋げて、関係組織のネットワーク化を考えています。ネットワーク化については、対象地域が広く、参加組織も多くなることから、課題もたくさんあると思われます。先生方のお考えは如何でしょうか。

舩山　ルート観光は基本的に連携です。最も成功しているのは、スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」で、世界中からやって来る、歩くキリスト教巡礼の道です。

日本には「四国八十八ヶ所」と「お伊勢参り」があります。これらの特色は沿道住民が非常に協力的なことです。お伊勢参りは施行といい、四国八十八カ所ではお接待といい、地域住民が協力することによって、歩く人と一緒になって自分たちも功徳を受けるという発想です。

バードの取り組みも、街道に沿った地域の行政や地域住民がこの計画に対して、協働の心を持ってないとうまくいきません。

ルート観光は、時間をかけて基本コンセプトやシンボルマークを創ってブランド化し、一定の方針に沿って景観整備、ソフトサービス体制の整備、案内書の作成、情報提供……など総合的な取り組みが必要です。

それから、これまではボランティアの活動でやっていたと思いますが、“同好の士”から一歩でなければなりません。

最近はDMO（Destination Management Organization））という、地域を経営し、マーケティング・研究・分析し、商品化をする本当のプロモーション組織の設置が叫ばれています。DMO成否の最大のポイントは、専門家の雇用や自主的財源をどう作っていくかです。また、このルート観光を活かすためには、広域観光推進機構や広域DMOとの連携が重要です。

渋谷　やはり新しいことを創っていくには、改革も必要ということですね。

中村　遠いところから来て１カ所に滞在するほか、折角だから幾つかのところを回りたい人もいます。この双方を可能にする情報提供が大事です。

もう一つは、比較的容易に泊まれる宿は、我が国ではとても難しい。外国でいうペンションやB&B（bed＆breakfast）の様に行って直ぐ泊まれて、しかもリーズナブルな値段が大切でしょう。また、１カ所だけで宣伝するのではなく、幾つかでネットワークを組み、広く知られるようになれば、新しい需要も出てくると思います。

まとめ

渋谷　では、最後にまとめをお願いします。

中村　皆さんにやっていただきたいことは、バードの仕事をもっと多くの人に知ってもらうことです。この界隈では知られていても、関西では全く知られていません。

彼女が残してくれたものは、我々の世代やこの地域への大きなプレゼントであり、これを活かすためにはみんなに知ってもらいたいと思います。

更に日本だけではなく、母国イギリスでも同様です。イギリスとは違う景色や食べものとか人情が日本にあり、極めて安全なところだと、インターネットなどを使ってアクションを起こす必要があります。

舩山　山形及び東北は、インバウンドが非常に少ないです。もともと日本全体に少なかったのですが、2003年に ビジットジャパン キャンペーンが始まってから動きだしました。それまでは欧米人が主でしたが、経済が良くなったアジア諸国から急増しました。

インバウンドはこれから非常に伸びます。しかもほとんどがリピーターです。リピーターの行動は、ゴールデンコースから徐々に地方に行きますので、アジアの有望な市場は、必ず東北あるいは山形に向いてきます。決して焦ることはありません。腰を落ち着けて頑張ってください。

渋谷　今日の基調鼎談では、お二人の先生から貴重なご意見と示唆をいただきました。更にこれからの分科会とバードの道に関わる交流ネットワークが前進することを願って、鼎談をお開きとさせていただきます。

「アルカディア街道を活かした地域づくりと観光」

バードの歩いたアルカディア街道の変遷と沿線地域の状況を踏まえながら、これからの地域づくりにどの様に生かして行くべきなのか。そして、この街道を観光（インバウンドも含めた交流人口拡大）に繋げるかを考えました。

コーディネーター
宮原 育子 氏（宮城学院女子大学現代ビジネス学部長）
アドバイザー
和田 賢哉 氏（山形河川国道事務所長）
パネリスト
申橋 弘之 氏（金谷エンタープライズ(株)代表取締役・金谷ホテル創業者の孫/日光市）
古賀 方子 氏（全国街道交流会議専務理事/福岡市）
西田　徹 氏（金山町景観政策推進員/山形県）

バードとの関わりや活動の紹介

宮原育子氏（以下**宮原**）　今日は、三つのフェーズに分けて進めたいと思います。最初にバードとの関わりなどについて、申橋（さるはし）さんからお願いします。

申橋弘之氏（以下**申橋**）　私と金谷ホテルとの関係は、私の父が金谷ホテル創業者金谷善一郎の4男で、善一郎の姉「せん」の嫁ぎ先の申橋家に養子に入りました。私は善一郎の孫になります。

金谷侍屋敷は、1630年前後の東照宮造営の頃に作られた寺侍の屋敷で、1800年前後に金谷家が転居した様です。金谷家は、代々東照宮雅楽の楽士で、笙の奏者でした。

図1 バードが描いた侍屋敷

1870年（明治3年）に、日光に来ていたヘボン博士へ部屋を提供したことから外国人専用ホテルを勧められ、1873年にカテッジインを開業し、宿泊客からは「サムライ・ハウス」（図1）と呼ばれていました。1893年に新しい今の金谷ホテルに移りましたが、バードは1894年と1896年にも同ホテル泊まっています。

金谷ホテル所有のバードの写真は2枚あります。1878年の最初の時と1896年来訪時のサイン入り写真（本紙1頁右上写真）でフロントに飾っています。

図2 バードの泊まった部屋

金谷ホテルには、当時の宿帳が今も残っており、バードは1881年にジョン・ビショップと結婚していたのでビショップとサインしています。

「金谷ホテル歴史館」は、バードの泊まった部屋の京間の8畳間（図2）や通訳のイトウが泊まった7畳間も現存しており、平成26年国の登録有形文化財に認定され、現在一般公開しています。

金谷一族でバードに会ったのは、バードが善一郎の妹と書いている姉の「せん」です。それから「善一郎」と、せんの娘「かね」は12歳の娘「はる」と書いています。

宮原　古賀さんに、西日本や全国の街道に関する地域づくりや観光の取り組みついてお願いします。

古賀方子氏（以下**古賀**）　全国街道交流会議は平成14年発足以降、各地で広域の協議会を立ち上げ街道を活用した地域づくりに取り組んでいます。

九州では、街道と人物という点で、古くから観光キャンペーンやイベントなどに天草四郎や西郷隆盛など、歴史上の人物を活用してきました。

静岡・浜松・岡崎の3市では、徳川家康をテーマに「出世街道」ということで連携しており、平成27年に家康公没後四百年祭を開催し、その後静岡市に徳川みらい学会が発足しました。

かって、岐阜県が和宮降嫁150年祭を開催し、長野県塩尻市の中山道でも、和宮にまつわるイベントを実施しています。岐阜県では、イベントをきっかけに町並みの見直しなどが進み、5年程前に県の旗振りで「中山道ぎふ17宿連携会議」が発足しました。

文化庁認定の「日本遺産」があり、文化資源をストーリーで結んで観光に活かすというものです。人物をテーマにしたものもあり、例えば岐阜市では戦国武将イメージの織田信長を別の面からとらえた「信長公のおもてなし」をストーリーとしています。

宮原　次は、西田さんに金山町について、お願いします。

西田徹氏（以下**西田**）　金山町のまちづくりとして、地理・歴史・産業の3要素で進めてきました。

地理的には、川上の責務として清流を守る。歴史的には、羽州街道の宿場町やバードがロマンチックな場所(図3)と褒めたことを大事にして次世代に引き継ぐ。産業的には、金山杉を活用する林業振興で、1次産業の植林による林業の活性化、2次産業の製材業や大工技術継承による住宅建築の普及、これが街並み形成に繋がり、そして３次産業の交流促進へという循環形成を目指しています。

このまちづくりは、昭和30年代から始まり、昭和58年に「街並みづくり100年運動」を提唱しました。当時の町全住宅戸数が2,000戸、毎年20戸の住宅新築・改築があり、100年掛かるという計算ですが、いつもここから100年先といった将来を見据えたまちづくりを目指しています。

図3 上台峠からの金山

以降、景観条例制定や助成制度創設などにより、伝統的な「金山住宅」(図4)を普及させながら街並み整備を進めて来ています。

図4 金山住宅

そのため、当時最高30万円（現在80万円）の助成金とガイドラインを設けて進めており、昭和61年から平成29年の対象は1,662軒（新築362、増改築186、色彩変更他1,114）、助成金額2億4,800万円ですが、建築全体費は94億6,200万で、町の経済を動かす大きな産業になっています。

そして公共事業を中心とした地域資源の活用や施設整備を実施し、来訪者への開放と案内を進めてきました。また道路は、裏道の整備から始めて住環境全体が良くなるような試みも行い、住宅の街並みと公共施設が点から線へつながり、面へと広がって来ています。

なお、町の財政規模では、一気に出来ないので、マスタープランを作成し、可能なところから実施していくという方法をとっています。

宮原　次に和田所長からバートの歩いた道の変遷をお願いします。

和田賢哉氏（以下**和田**）　バードが歩いた街道は、図5の緑色

ルートで、新潟県から東に向かい、川西町あたりから北上しています。

バードが苦労して通った街道のうち2カ所の峠を紹介します。越後米沢街道十三峠の宇津峠は、天候も改善したことや最後の険しい峠ということで、そこからの米沢平野の眺めを"アジアのアルカディア"と評価しています。

図5 バードの歩んだ街道

羽州街道を北上していくと秋田県境付近に主寝坂峠や雄勝峠の難所があり、バードも非常に苦労したという記述があります。また、「院内の宿の隣部屋には、越えてきた峠を測量中の技師が6人泊まっている」という記述があり、まさに初代山形県令の三島通庸が金山新道を計画していた同時期にバードが歩いたということです。

次に、バードが通った頃からの道路整備の歴史を少し振り返りたいと思います。

明治9年から約6年間で、荷馬車が通行出来る様に五つのトンネル、65の橋を架ける合計延長約350kmの大規模な道路整備が、三島県令により強く進められました。山形県の道路整備の歴史として、欠かすことの出来ないものです。

その後、昭和初期には自動車の通れる道に改修をし、昭和の戦後になるとモータリゼーションに対応するため、線形の改良、特に峠部はトンネルや橋梁など大規模な工事を行いました。

そして、昭和から平成にかけては、交通量の増加に対応する拡幅やバイパス事業が行われ、現在は高速道路の整備です。特に山形県は高速道路整備が遅れていることから、当事務所では力を入れて進めています。

具体的に、バードの歩いた道の整備の歴史を紹介します。

バードが新潟から東に向かう経路、現在の国道113号は、明治14年から着手しました。この横軸は県管理の国道でしたが、昭和42年の羽越水害で被災した橋等の復旧も含め国の直轄区間に編入され、以降、国道113号は国が事業を進めており、昭和・平成の時代には宇津峠部のバイパス工事も行っています。

続いて、バードが北に向かった縦軸、現在の国道13号の整備です。上山以北は羽州街道と呼ばれていました。

三島県令による道路整備箇所は図6です。まさにバードが歩いた頃から本格化をしたという状況です。

図6 三島新道（現国道13号関連）

昭和の戦後になり、国道13号として、猿羽根峠や主寝坂峠のトンネルなどの整備が行われ、昭和・平成の時代に入ると、交通量の増加に対応するために、多くの箇所で拡幅やバイパスの整備を実施して来ました。

バードや街道の観光化を進める課題

宮原　次は2番目のフェーズですが、それぞれの取り組みの課題について、申橋さんからお願いします。

申橋　2017年の日光市全域の入込客数は1,210万人、旧日光市の東照宮の周辺は639万人です。宿泊者は344万人、旧日光市で127万人です。外国人宿泊数は数10万人と少数です。二社一寺の見学者が318万人です。例年は230万人位ですが、昨年陽明門の修理完成による特異現象だと思います。

「金谷ホテル歴史館」の来館者は12千人、近くの大正天皇の皇太子時代の田母沢御用邸は110千人です。この歴史館には、レストランがあり3万人弱位です。歴史館では、ビデオのほかに、説明員と音声のガイドを行っています。英語は12月からスタートしました。開館3年でようやく日光の観光スポットになって来たというところです。

文化施設の金谷ホテル歴史館、田母沢御用邸、イギリスとイタリア大使館別荘、自然博物館などでは、連携して割引をして誘客に努めています。はとバスの観光コースは定着したと思います。またヨーロッパのエージェントと提携し、スペイン語系の人が毎日の様に来ます。良かったのは、NHKの「ブラタモリ」で2015年12月に放映されTwitterなどで話題になり、客の増加につながりました。

しかし、バードを知っている人は、外国人も含めて非常に少ないのが現実です。

バードの位置付けとしては、金谷ホテルが世界に広まった大恩人です。それから外国人が見た明治初期の日本というテーマでは外せない存在です。

それで、バードを知って貰おうと、HPやビデオ、来館者用パンフレット、資料室などでのキャプションのほか、金谷ホテルフロントの写真掲額やホテルの館内案内時にバードの案内も行っています。

宮原　次に、古賀さんから街道を生かした地域づくり、街道観光の課題についてお願いします。

古賀　家康の出生地岡崎市は松平家菩提寺の大樹寺から岡崎城を見通すビスタラインを整備しています。また、浜松市は「若き家康」をテーマに、浜松城を出世城として「出世の街・浜松」を売り出しています。静岡市は、家康が幼少期や大御所で過ごしたゆかりの街として、間もなく歴史博物館が整備されます。

次に、個々の市町村では連携した取り組みが難しいところを県が関与することで街道の広域活用が進んだという事例です。

岐阜県の呼びかけで連携会議ができたと話しましたが、静岡県でもインバウンドへの「TOKAIDO」の活用のために県内22宿が連携する動きがあり、静岡市は東海道共通の路面表示を近隣に広めようと取り組んでいます。

「空の道」の話になりますが、鎌倉時代の僧で静岡出身の聖一国師が、博多にいた時に祇園山笠を始めたということで、静岡空港の福岡便就航を機に静岡市と福岡市との交流が進み、聖一国師ゆかりの博多の承天寺に静岡からたくさんの人が訪れるようになりました。聖一国師が開基の東福寺がある京都も加わり、京都・静岡・福岡の商工会議所の交流に発展しました。

宮原　福岡と静岡の連携は、街道というより歴史的な由来を探した例と思いますが、いろいろなところにヒントがあることを教えいただきました。

それでは、西田さんから金山の課題をお願いします。

西田　景観まちづくりの課題を5点ほど紹介します。

一つ目は、徐々に空き家や空き地が増えて、町中心部でも家並みが揃わなくなって来ています。

次に、東北中央自動車道がもう少しで全線開通することから通過する町になる心配があり、訪ねたい町にすることが課題です。

三つ目は、平成14～16年頃を境に、新築住宅が減って来ている中で、ハウスメーカーの進出で、地元の大工・工務店による住宅が少なくなっています。理由として、ローン仕組みなどのあ

るハウスメーカーが有利などがあります。

四つ目は、景観を活かした交流人口の拡大と地域の活性化です。街並み案内人の利用数が増えており、特に県外からが右肩上がりに増えています。先日、イタリアから大学の建築の先生と学生、職人さんが来て、地元大工と交流しました。かんな削りに挑戦してすごく喜んでいました。この様な体験型も観光に繋がる例だと思いました。

最後に、施設整備を行った道路や公園などが多くなり、その維持管理と修繕の費用拡大に、どの様に対応するかも課題です。

『日本奥地紀行』を活かした今後の地域づくりや観光への提言

宮原　3番目の方のフェーズに入ります。最初に和田所長から、今後の道路整備について話題提供をお願いします。

和田　現在進めている道路事業について紹介します。

先ず、国道113号では新潟山形南部連絡道路として、開通している赤湯バイパスに続く梨郷道路が事業中です。また、新潟県境部から小国町区間の小国道路は事業化の手続き中です。

東北中央自動車道では、無料区間として五つの事業を進めています。他に、NEXCO東日本が施工している南陽高畠から山形上山までの約24kmが今年度開通予定です（図7）。

ただし、高速道路が繋がると、通過される街になる懸念もあります。その様にならないためにも、高速道路の整備効果を地域でしっかり活用したまちづくりの取り組みを行っていただきたいと思います。

図7　東北中央自動車道の事業箇所

そのため沿線の市町村や経済団体が参画した「東北中央自動車道の利活用促進による地域活性化協議会」を組織して、特に観光の誘客や、雇用の確保のための企業誘致などの地域振興に取り組んでいます。

また、道路標識の地名を観光客に配慮した案内にしたり、古道の復元、清掃活動、街道案内標識の整備を「日本風景街道」でバックアップしています。十三峠でもバードのPR等も含めて取り組んでいます。更に、今日設立された交流連携ネットワークともしっかり連携をして取り組んで行きたいと思っています。

宮原　それでは金山町の西田さんから今後の地域づくりへのご提言をお願いします。

西田　私は定年後、山形大学大学院で、地域観光資源を活用した広域連携の研究に取り組みました。その中で、「羽前と羽後を結ぶ"出羽の路"羽州街道」として、新庄・最上地域から湯沢・雄勝地域までの地域資源を調べました。さまざまな資源や文化があり、県境を跨いで羽州街道やバードで連携した取り組みが出来る様になると思っています。

次に金山町の人たちの自主的な取り組みを紹介します。

街中心部の大堰公園と調和した景観を造っている杉皮葺き屋根の葺き替えに約130人の住民が参加しました。羽州街道の上台峠と森合峠では、地域住民が毎年草刈りなどの保全活動を行っています。また、金山の街を展望できる楯山の広場整備などを地域住民が行いました。

最後に、大学生の提案で、街の家が軒下に吊行灯を提げて、街を明るくした夜の街並み散策の取り組みが行われています。

宮原　次に申橋さんからお願いします。

申橋　日光市が旅行者を対象に満足度調査を実施しています。その結果で私が一番ショックだったのは、「おもてなし・ふれあい」で、"魅力的"・"やや魅力的"は相応にあるが、"普通"が３割もあります。日本人はアンケートで遠慮して書きますからかなり問題だと思っています。「交通の利便性」も、"普通"・"あまり魅力がない"が５割で問題だと思っています。

今後の課題について、2020年オリンピックでの観光客対応、金谷ホテル歴史館の館内整備とレストランでのサービス体制の充実、マスコミへの働きかけの強化（SNSだけではない、年配者対策も）です。また金谷ホテルは2023年に150周年を迎えます。この準備も我々の課題です。

そしてバードについては、今後もさまざまな取り組みを実施していきたいと思っています。

宮原　古賀さんからお願いします。

古賀　街道の沿線にある多くの資源を繋ぐというのは至難の技です。そのため、物語性を持たせて徐々に連携を進め、県の関与や国の広域観光の支援制度などを利用することも一つの手段だと思います。

バードは、ロマンを感じさせる大変良いストーリー素材だと思います。バードが感動した景観やおもてなしなどを追体験出来るような地域の連なりになれば良いなと思います。

それぞれの地域の皆さんの多くはボランタリーで活動している訳ですから、自分たちのエリアを越えて他と連携することは、簡単に出来ることではありません。観光は、地域が連携するためのひとつの手法として有効なのではないでしょうか。

東海道の「箱根八里」は私共がお手伝いして今年「日本遺産」に認定されました。ここには江戸時代の並木や石畳、一里塚、関所、茶屋などがフルセットで残っており、ここで江戸時代の旅を追体験した方が、他の街道も訪ねてみようと思っていただくような「街道観光」の重要ポイントになるため頑張っているところです。

先ほど話にあった高速道路が出来ると通過地域になってしまうという問題です。鳥取県内では、道の駅から因幡街道の宿場町を回遊する仕組みをつくり、中国自動車道上に各宿場の案内を出す社会実験を実施しました。無料高速道路にはサービスエリアがないので、旧宿場町がその役割を果たそうということです。これを契機に標識令が改正され、高速道路上で道の駅など民間施設の案内誘導が出来るようになりました。

まとめ

宮原　古賀さんからバードの価値として、街道を歩いた目線でのさまざまな見え方が、私たちの宝になっているというご指摘と、そこにロマンを感じるとの評価をいただきました。

また、申橋さんからは、金谷ホテルの貴重な歴史資料をご紹介いただくとともに、日光の観光の課題として、地域の人のおもてなしとふれあいが挙げられました。これから外国人の方も、たくさん東北にみえると思いますが、かつての素晴らしい街道をもとにして、過去から現在・未来という形での街道のまちづくりが今進んでいるということを伝えていく必要があると思います。

それには、西田さんからご提案のあった街道の宿場や地域の人達が、繋がりながらまちづくりをして、お客さんをいざなって行く必要があると思います。

改めて、バードの通った道の観光まちづくりをこれからも考えていく必要があるのではないかということで、大変貴重なメッセージをいただいたと思います。

第2分科会 パネルディスカッション

「『日本奥地紀行』の描写と魅力」

『日本奥地紀行』の内容に対して、旅行作家の視点から考察し、本書の記載に沿って実際に歩いた経験から、地名や当時の風習などの検証や新たな発見を紹介していただき、歩く旅の楽しさ・面白さを考えました。

コーディネーター **藤田 洋治 氏**（山形大学地域教育文化学部教授）
パネリスト **秋山 秀一 氏**（旅行作家）
立松 和宏 氏（『日本奥地紀行』の旅・研究会）
錦　　啓 氏（元山形県博物館館長）

バードとの関わり

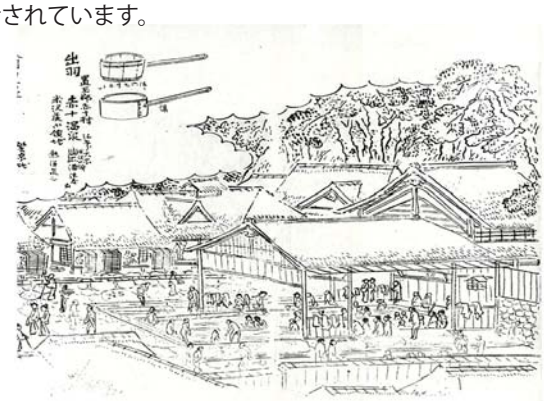
藤田洋治氏（以下**藤田**）　この分科会では、「歩く旅の楽しさ・面白さ」を考えていこうと思っています。では、秋山さんから自己紹介をお願いします。

秋山秀一氏（以下**秋山**）　私はフィールドワークを中心にやってきました。旅行作家としては、ＮＨＫで「金曜旅倶楽部　旅に出ようよ」という全国放送の番組があり、3年間、全国をいろいろ取り上げました。山形では井上ひさしさんとバード絡みで川西町を訪れ、バードの道を歩いたりしました。ヨーロッパ観光事情をYouTubeで発信するなど、世界を旅する生活を40年間行っています。

立松和宏氏（以下**立松**）　私達は『ザック担いでイザベラ・バートを辿る』という本を昨年出版しました。2013年の５月から足掛け５年かけ、バードの行程を歩きました。峠とか街道を中心に、横浜から東京を経て、東北地方を縦断し、北海道の平取（びらとり）まで歩いてきました。

私は名古屋大学時代ワンダーフォーゲル部でしたので、10人前後のOBが中心となって11回に分けた旅をプランニングし、皆で歩いたんだから本にしようということで完成させました。街道含めて歩いた峠は25か所です。

錦啓氏（以下**錦**）　私は山形県置賜盆地にある南陽市赤湯生まれです。なぜバードが我が郷土を褒め称えたのか？　バードの本を訳した高梨健吉さんは、「明治11年の置賜の人間が、圧迫のない自由な生活をしていたのは、とても信じられない」と話されています。



赤湯温泉（長谷川雪旦画、天保2年）

私なりに考えてみましたが、堀秀成という明治時代の神祇（じんぎ）省の官僚が、明治の初めに神道を広めるために東北各地を行脚して、赤湯の旅館に泊まります。すると近くの部屋から、女性3人が古今集の読書会をしている声が漏れ聞こえてきました。

堀は歌人でもありましたから、3人に歌を送ったところ、直ちにご婦人から返歌が来たということを私は知りました。明治15年のことです。特に高貴でもない婦人が、温泉につかりながら古今集の読書会をしていた。もしかしたら置賜は、圧迫の無い自由な暮らしをしていたのかもしれない、と山形新聞にエッセイを書いたことがあります。

バードの魅力

藤田　明治11年という時代に、バードが旅行作家として旅をして、この国や山形に対してどんな評価を下したのか。そのあたりについてお願いします。

秋山　バードは脊髄に病気を抱えていました。当時は一般庶民が海外に行くことは考えられない時代でしたが、バードは家庭的に豊かであったということと、「苦難を克服すると元気になる」という考えがありました。その苦難は何かいうと、大海原に出て航海することです。そこで23歳の時に進められ、カナダ・アメリカに行きましたが、のち日本にも来ていくつもの紀行を書き、本にまとめて高い評価を受けます。

私は初めてロンドンに行ったとき、地質博物館や科学博物館、自然史博物館がある一帯を訪ねましたが、その一角に英国王立地理学会があります。バードは女性として初めて王立地理学会の名誉会員となり、男だけの世界だったものが、彼女によって開かれたのです。

藤田　ヴィクトリア朝レディ・トラベラーの筆頭というと、最初に特別会員になったバードを指し、男だけの世界を開放したわけですね。続きまして、バードの面白さ・楽しさ・発見とかについてお話しください。

立松　私たちのバードの旅へのチャレンジですが、最初にどこから始めようかという話になり、十三峠にしました。本来だったら横浜から順番に旅をすべきでしょうが、僕らはもともと山歩きですから、少しは厳しい所がいいと考えたのです。バードは天候の悪い時期に旅をしましたが、我々は５月でしたので天候に恵まれ、残雪の山を見ながら楽しくゆっくり歩くことができ、そこからバードにどっぷりはまってしまいました。

藤田　錦さんが、山形のバードの足跡で感じていることについてお話しください。

錦　今年はバードが来日して140年ですが、その間にバードに関係するものはほとんどなくなりました。しかし、他県に比して山形県にはさまざまなものが残っています。十三峠もそうですし、眼鏡橋などもそうです。

南陽市のハイジアパーク館内に、イザベラ・バード記念コーナーがあります。20数年前、バードを記念したコーナーを作ろうという

イザベラ・バード記念コーナー

話になり、開館１年前に２名の市職員をイギリスに派遣し、収集してきたものが展示されています。

過去と現在を旅するということで、ツインタイムトラベルという言葉がありますが、私はバードの旅に関しては、ツインどころかトリプルだと思っています。この街道をどうやったら今に繋げていけるか。どうやったら資源として活用できるか、考えてしまいますが、過去と現在を重ね合わせ、我々のこれからの生き方を考える。これがバードの旅、バードの街道を考える一番の魅力だろうと思っています。

藤田　バードの魅力ということですが、秋山さん旅行作家としてどうでしょう。

秋山　『日本奥地紀行』は私も大好きな本で、最初の1冊はボロボロになってしまいました。バードは人が行っていないところに行きたいと考えたので、春日部から日光に行って、会津西街道で大内宿に行き、津川から新潟に出て、7月に山形に入ったところで置賜地方の田園風景を見て、「東洋のアルカディア」と感じますね。それから東北を北上し、非常に興味があったアイヌに会いに行きます。バードは最初から自分の目で見て本にすることを考えていました。一番脂が乗っていた40代に日本に来て、山形の道をずっと歩いてこれだけのことを書いてくれましたから、これを放って置くのはもったいないです。

十三峠の魅力

藤田　バードが歩いたところが残っている十三峠を歩いた立松さん、十三峠の思い出をお願いします。

立松　十三峠はすごい魅力と風情がありますね。また、地元の方が道を美しい状態で保つため、大変な努力をされています。残念ながらバードは、十三峠での風景よりも、苦労した話や貧乏だというよう記録が多いです。宇津峠から米沢平野を見て、思わず賛美の言葉で「私は日光を浴びている山頂から、米沢の気高い平野を見下ろすことができて嬉しかった」と書いていますが、アルカディアという言葉はまだ出て来ません。

雨が止んで晴れ間が見え、気分爽快になって来たから出てきた言葉だと思います。宇津峠に「アルカディア遠望の地」という立て札が立っていますが、そこに限ったことではなく、置賜平野全体の印象をまとめた言葉がアルカディアであろうと感じています。

藤田　錦さん、黒沢峠の魅力に関していかがでしょうか。

錦　芦原伸という旅行作家がつい最近、『新にっぽん奥地紀行』という本を出版し、バードはブラントンの日本地図の空白を埋めようと、自らの意思で十三峠の難路を選び、苦難の末にアルカディアの風景に感動するというドラマを創作したかったのではないか。つまりバードの旅行記の山場は、事前に用意されていたという解釈です。かなり議論のあるところですが、面白い見方です。

私はバードの描写の魅力や面白さは、人間を描いているところにあると思っています。確か浅草寺のところで、「私が一番関心あるのは人間だ」と書いていて、これは見逃せません。黒沢峠はまさに人間劇というか、人間ドラマが鮮明に浮き上がってくる場面です。一人の女性が泥酔して歩いて来ると「伊藤は両手で顔を隠していた。どうしたらいいかわかりませんと。あんなものを見られて、私はとても恥ずかしい」。これは面白いと思いますし、バードはバードで、「これは私の聞いていた日本なのだろうか」ということで、がっかりしてしまう訳です。

藤田　浅草寺のところは確かにそうですね。この当時、イギリスの文化に比べて日本の文化ははるかに遅れていますが、日本の文化そのものを受け入れて、日本の食べ物で旅行しようということ自体が面白いと思います。

錦　赤坂憲雄さんは、当時の庶民とか農民は、触れられて困ることを質問された場合は、知らないふりやしらを切る、これが生きる知恵だったと指摘しています。渋谷光夫さんは、こういう気性は置賜人独特の気性であると書いていますが、私は違うと思っています。これは赤坂先生がおっしゃるように、当時の日本全体に通用することで、生活の知恵だったと思っています。

また日本は、バードが称賛するような治安の良い国だったかがありますが、私は相互監視のシステムが強烈に働いていて、それが治安に結びついていたとみています。

藤田　日本の治安の良さに関してですが、イエズス会の人たちが、夜の10時頃になっても女性が一人で歩ける日本は不思議な国だと書いています。

秋山　バードの父親は牧師で、厳粛な家庭に育っています。またイギリス人はあまりお酒の話を話題にしないし、お酒は飲まないという人がかなり多いです。日本の大学生がアメリカに行って、公園で飲んで刑務所に入れられたということがありました。店でもライセンスを取らないとお酒が出せないし、飲む場所もプライベートなところ以外はだめです。それは酔っ払いに対する厳しさの表れで、140年前のバードの感覚は、今私たちが考えるものとは違ったものだったはずです。

ところで、バードは人を観察する目はものすごく厳しい人でした。伊藤を通訳に決める時も、いろんな人に面接したうえで彼に決めましたが、いろいろな反応から人を見る目を持っていたと思います。

アジアのアルカディア

藤田　先ほど立松さんから、アジアのアルカディアの話は宇津峠１か所でのことではなく、何か所かを指した全体のことだと話がありました。宇津峠に来るまでの小国はずっと天気が悪く、眺望はほとんどききませんでした。ところがこのあたりまで来ると梅雨の中休みで急に青空になり、美しい新緑となります。

立松　私はそういう側面が非常に強いと思います。彼女の表現を見ていると、率直というか、そのときの体調がかなり反映されているようです。だからこの時は気分が良かったのでしょう。難行苦行から解放されて、開放感があったのかなと。それは置賜にとっては、非常にラッキーだったという気がしています。

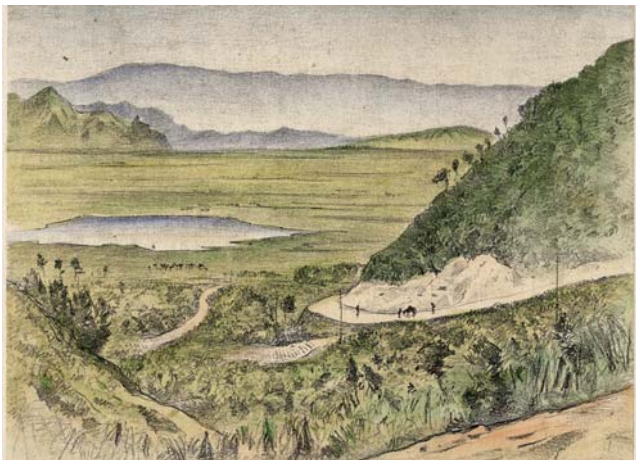
散居集落（飯豊町）

藤田　実はバードが褒めている所は、どこも天気が良いです。天気が悪くて褒められるというのがほとんどなかった。これはひとつの特徴と感じます。

錦　雨具にも関係していると思いますが、バードは天気が良いと非常に喜んでいます。当時は雨具といっても、粗末な油紙あるいは和紙に柿渋を塗った雨具ぐらいしかありませんでした。雨だったらアルカディアとは決して言わなかったでしょう。立松さんは皮肉っぽく、注記に記していますね。「山形の人はアルカディアと喜んでいるけれども、これは天候に恵まれていたことを忘れちゃいけない」と。

私は置賜を褒めた理由として三つの見方があると思います。一つは長井市とか飯豊町の散居集落です。もう一つは小松から赤湯に向けて田んぼ道を歩くとき、朝日、飯豊、吾妻、蔵王の山々が見えます。この遠景と距離感がたまらなく良いので

す。きちんと手入れされた田園地帯を、良い日差しの中で歩いて行く感覚がアルカディアだと。三つめは赤湯の鳥上坂から白竜湖を見下ろす風景です。



鳥上坂の眺望（高橋油一画　明治17年）

立松　私も社会人になったころ、山形に暮らしたことがあります。仕事で山形から米沢に行くとこの風景に接してすごく感激し、これが山形の美しさだという印象がいまだにあります。

秋山　なぜ私が旅を始めたのかですが、『奥の細道』とか『更級日記』は非常に面白いのですが、自分が旅したほうがもっと面白い。それで旅するようになって、イギリスにも一人だけで行って、キャンプツアーでテントを張って３週間ほど回ったりしました。必ずと言っていいほど雨が降りますが、晴れただけで嬉しくなります。だから天気の違いに関して、バードの気持ちも良く分かります。

あるアメリカの雑誌を読んでいたら、70歳で亡くなった方と100歳まで生きた方では、100歳まで生きた方がトータル医療費は少ないそうです。70歳で亡くなる人の場合、いろんな病気で医療費がかかるためだそうです。長く生きるためには楽しいことをやることです。年配の人はやりたいと思ったらすぐ動いた方が良いです。やらない理由はいくらでもありますが、旅をするとありがたいと思い、心に余裕が生まれます。すると周りの人に優しくなり、その周りの人も寄って来て、さらに人生が楽しくなります。

最後に

藤田　それでは、最後に言っておきたいことをお願いします。

立松　バードの本には地名の間違いがたくさんあります。山王峠を最大級の褒め言葉で表現していますが、この文章の前後関係からいうと、山王峠ではなく、大内宿の手前にある中山峠という小さな峠のことですね。十三峠でも多くの混乱をしています。峠の名前を間違えたり、他の峠と混同したりとかいろいろありますが、なぜこのような間違いが起きたのかを考えてみました。

一つは、現地の方から峠の名前を聞いた場合、正確に聞き取れる訳がないと思います。ましてや方言です。通訳の伊藤鶴吉はご存知のように横浜生まれなので、山形の言葉を理解が出来たのか。さらにバードに英語で伝えた訳ですから、いろんな段階で間違うのも無理はないかなと思います。

それから彼女の紀行文は、数日分まとめて文章化しています。毎日書いているわけではなく、２～３日分を手紙という形でまとめています。そうすると記憶間違いがあると思います。

また、天候が非常に悪かったので、体は大変疲れていて理解力も判断力も落ちていたでしょう。もともとブラントンの日本地図の空白地区ですから、データもないわけですね。

藤田　立松さんが言った様に、２～３日分とかをまとめて書いていますが、実際にはこれをいつ書いたのだ？　というのが問題だと思います。例えば、小松や上山からこの当時、イギリスに手紙を出せるでしょうか。たぶん出せなかったと思います。

錦　私は金坂清則先生の説が最も説得力があると思います。sentという過去形をまったく使っていない、郵便事情からすれば出しても届かないので、大事な原稿を送るわけはない。

バードはノートに書き留めていたものを、帰国してから原稿に起こしたという説で、アルカディアはどこを見て書いたということはないと思います。４～５日の総合的な印象を書いたと私は考えています。

川西町の小松で、伊藤を介して女性から受けたイギリスについての質問にはとても驚かされたとあります。私もこんな好奇心の強い婦人たちが、この田園地帯にいたのかとびっくりしました。このむき出しの好奇心こそが明治の日本を支えたんじゃないでしょうか。

じゃあどんなことを質問したのか。読んでいくと既婚婦人は貞淑で、男性はその反対だとあります。これは性にまつわる、セクシャルの話じゃなかったかと想像します。

『日本奥地紀行』を読む時には、こういう性を含んだ道徳の問題、これは見過ごせないと思っていますが、この本の最大の問題は宗教心でしょう。ここは露骨に出ていませんが、バードの旅の重大な目的は、キリスト教の普及・浸透であり、神道の現状を探ることだったと思いますので、宗教の問題、道徳の問題は切り離せないというのが私の考えです。

立松　一つだけ言い忘れたことです。我々は全部の峠を歩きましたが、主寝坂と雄勝峠に関しては廃道になっていて非常に残念でした。黒沢峠みたいにとは言いませんが、せめて歩ける様になれば、もっと楽しいかなと感じました。

秋山　バードの気持ちになって少し援護したいと思います。いまの二人がご指摘されたことが、まさにバードが実際に歩いた証でもあります。

スコットランドにピトロッホリーという町がありますが、それを漱石は『昔』というエッセイで「ピトロクリ」と書いています。漱石は自分の耳で聞き、そのように書いたと思いますが、ここでは通訳を通じたワンクッションがあったと思います。

私が18年前に取材で中国行った時の経験ですが、当時は北京から国の通訳が来る時代でした。すると、さっきのお話のように現地の人が言っていることをそのまま通訳していないんですね。現地の人間に英語で聞くと違うことを言っていましたが、その辺はアバウトであっても、全体の気分とかその時の流れとかがあれば楽しいです。

バードの本を読んで現在と違っていても、「なんだ、ここは間違っているわ」くらいの気持ちで、「バードとお友達になる」という感覚で楽しめば良いと思います。すると140年前にバードが歩いて、この本を残してくれたことが、貴重な財産だと感じてくると思います。

藤田　この本からは、近代化していく文明開化の日本の中で、道路が立派に出来ている所とか、学校制度が出来て子どもが石版を持っている部分など、明治の新しい世の中と古いところとを見比べることが出来たらと思っています。

最後は、やはり「楽しまなきゃいけない」、「体を動かさなきゃならない」だと思います。そして、自分たちが楽しむことから観光はスタートするのではないかと常々思っています。

（文責：事務局）

第3分科会 パネルディスカッション

「バードの足跡から見る地域景観」

イザベラ・バードの足跡から代表的な新潟県（阿賀野川）、山形県、北海道の沿線景観を紹介していただくとともに、その地域の景観を歴史・文化や、地理・地質などの観点から探りました。

コーディネーター **大友 幸子** 氏 山形大学地域教育文化学部教授
パネリスト **川上 健** 氏 阿賀町観光ガイド／新潟県
八木 浩司 氏 山形大学地域教育文化学部教授
金子 正美 氏 イザベラバードの道を辿る会 会長／北海道

大友幸子氏（以下**大友**）　今日はバードと景観がテーマです。「景観」は地理学の主要な研究対象になっており、自然景観と文化的景観に分けられます。風景とか景色とかの他に、色々な要素を含んでいる用語だということです。では、最初は川上さんにお願いします。

阿賀野川の景観

川上健氏（以下**川上**）　今日は「バードが見た阿賀野川の景観」について、ありのままを伝えたいと思います。

バードは明治11年7月3日に津川から船に乗り、新潟まで下りますが、その間の阿賀野川上流部の景観が素晴らしいと褒めています。今日は、津川から新潟に下る途中について重点的に紹介します。

先ず、阿賀町（平成17年津川町外１町２村が合併）の隣がすぐ福島県で、この一帯は明治19年に新潟県に編入されるまでの約700年間、会津の一部で、バードが通った明治11年はまだ福島県でした。

阿賀野川は津川の町の真ん中を流れ、会津と日本海を結んだ物流の動脈で、外に新発田と若松を結んだ会津越後街道も通っていました。阿賀野川の水運は津川までで、上流には難所が多く、安定した就航はできませんでした。そのため、津川が水運と陸送の中継地として、大いに発展することになりました。

図1 バードが舟に乗った川湊

津川には大船戸と呼ばれる川湊（図1）があり、代官所が置かれ、向かいにはバードが泊まったと言われる本陣佐藤家がありました。湊の周りには廻米蔵、舟番所、蝋蔵などの施設があり、嘉永２年（1849）の津川の職業一覧を見ると、小揚・丁持という荷物を積み変えるための人足扱いのほか、日雇い、船乗り、筏乗り、荷造り、米・塩の商い、菓子屋が８店、飴作りが８店、造り酒屋が5軒ありました。旅籠、木賃宿もあり、宿場町としての機能も持っていたことがわかります。バードは津川の屈曲した通りや雁木のことを書いていますが、これは今でも見られます。

図2 阿賀野川水運

阿賀野川の水運ですが、津川から阿賀野川を下り、万願寺から小阿賀野川へ入り、酒屋の下流で信濃川と合流し、新潟湊へ下っていきました（図２）。津川から新潟までは、下りの舟は約８時間ですが、上りは帆を使っても3日から5日かかったと言われています。

昔の阿賀野川は河口近くで信濃川と合流していて、今の通船川がかつての本流でした。1750年代に新発田藩が松ヶ崎の余水吐を作りましたが、それが決壊して本流になり、通船川はほとんど水が流れなくなってしまいました。そこで小阿賀野川をすぐに改修して、舟が通るようにしたと言われています。

津川の湊から下流に向かってしばらくはゆったりした流れを進みますが、この先でかなり切り立った山の間に入っていき、本尊岩と言われる非常に狭くなった場所がありました（図３）。

図3 往時の本尊岩（大正初期）

当時は本尊岩のやや下流に経岩という石灰岩の岩がありましたが、後に昭和電工鹿瀬工場の原料として削られ、今は見ることができません。

図4 御前ヶ淵

昭和38年完成の揚川ダムのあたりから上流を見ますと、非常に切り立った岩肌が目に付き、御前ヶ淵と言われる難所があり水が渦を巻いて流れています（図４）。川の中央部に岩が出ている箇所（図５）もあり、当時から通行の妨げになっていました。バードも書いていますが、実際に事故も起きていました。

図5 河中の岩（年代不詳）

かつて福島県に属していた草水あたりまで下ると流れも緩やかになり、川幅も広くなります。馬下から阿賀野川下流部は、大正４年から昭和９年にかけて、大規模な改修工事が行われ、バードが見た景色と今を比較するのは難しい状況です。新潟市の中新田のある小阿賀野川と阿賀野川の分流点は、今と違い、阿賀野川が大きく蛇行しながら流れていて、北のほうにありました。

小阿賀野川は船宿が栄えた酒屋で信濃川に合流します。信濃川は今と違い、当時は上流に大河津分水もできていませんので、今よりももっと水量も多く川幅も広かったと思われます。バードはその信濃川を下り、新潟の町に着き、白山神社があった周辺に網の目のようにめぐらされていた水路の中に舟で入っていたと思います。

大友　川上さん、バードは津川までの山中を苦労して進みますが、その道は地域の方々に知られていますか。

川上　西会津側では、バードがひどい道と書いたことで、良い印象を持っていない方もいます。しかし、私も事務局をしている「会津街道ファンクラブ」では、数年前から街道を復活させる

べく、刈払いなどを実施し、何区間かで石畳の道が出てきましたが、まだ道半ばというところです。一方、西会津で街道歩きを開催すると、毎回かなりの参加者があることから、今後どの様にコーディネートしていけば良いか考えているところです。

山形を中心とした景観

大友　次は、八木さんにお願いします。

八木浩司氏（以下**八木**）　バードが見た東北日本ですが、『日本奥地紀行』を読むと、記述が悲惨という感じでしんどくなります。それは当時の内陸部の民衆の生活を相当正確に記載していたのではないかと、ポジティブな捉え方もできます。しかし、米沢盆地に入った途端に「東洋のアルカディア」と評価が変わります。いったいこれはなぜだろうということです。

バードは会津で磐梯山を目にしたはずですが、会津盆地での記述には出て来ません。峠を越えるときに飯豊山地を見て、日本離れした景観と記載していますが、バードの好きな景観というのは、天気の良い日に青空の下に雪山が見えてくるような景色だったと思います。

会津盆地の時は、そんなにひどい表現ではありません。ひどくなるのは、阿賀川流域を津川に向かう区間です。ルート的には中山間地の上り下りの繰り返しで、それも雨の中ですから、かなり心象を悪くしたと思います。

津川から舟で川を下った新潟には宣教師の方もいて快適に暮らし、休養することができました。しかし、また関川から山を越えて小国に入って行き、かなり大変だったと書いています（図６）。

図6 小国の中山間地

ところが、小松あたりで梅雨も中休みになり、快適な夜を過ごしていますが、新庄から北に行くに従って、また表現が前と同じになっていきます。結局は天気や道路事情などのタイミングの問題かと思います。

なぜ「東洋のアルカディア」と呼ぶようになったのかですが、「アルカディア」というのは「理想郷」という意味で、「アジアの理想郷」には定形があります。パキスタンのフンザや中国の雲南省の梅里雪山（ミンリンカンリ）など、里に梅の花が咲き、山の上には氷河があるといったオアシス的な景観がシャングリラやアルカディアとされています（図７）。

図7 アルカディアの理想田園景観

バードが小松から高畠、赤湯を経て、山形に入っていくあたりは、青空の下、遠くに飯豊山地や朝日山地が見え、田んぼの稲も育ち、街道脇の畑には花が咲き、桑や杏の実が生っている（図８）。まさに「私の見ていたアルカディア」と同じだと思ったのではないでしょうか。

私の専門的な考え方、見方でいきますと、バードの東北地方に関する記載には、自然科学的な景観分析があまりなく、実はランドマークを見ておらず、そういったことに関心がなかったのかと思います。

図8 米沢盆地の景観

バードは英国王立地理学協会の会員になっているので地理学者ですが、彼女の関心は民俗学的な人々の暮らしとかにあったのではないでしょうか。彼女が見ていたのは、常盤橋や済生館とか山形の街の中で、自然科学的な景観分析をやらない人の様です。

ただバードは地理学者ですから、見えているはずのものが見えていないのは、山形あたりではまだスイッチが入っていなかったのじゃないかと思います。

結論を言いますと、バードの記載は天候に左右され、「東洋のアルカディア」という表現は、青空、果樹園、お花畑などが偶然に揃った置賜がアルカディアになったのだろうと思います。

大友　八木さんは、バードは地理学者として、自然的な景観に対してあまり関心がなく、山形ではまだスイッチが入っていなかったということでしたが、地理学者ならいろいろ気が付くと思いますが。

八木　養蚕が盛んだとか、畑で何を作っているとかはすごく書いています。だから何か他に目的があったと強く思います。そのころプラントハンターという人たちがいて、世界各地でガーデニングに適した植物採集をやっていますが、同時にスパイだったとも言われています。バードも何か別の目的があったのかと見てしまいます。

北海道の景観

大友　次は、金子さんにお願いします。

金子正美氏（以下**金子**）　私は、地図を作る研究・教育をしていますので、「地図から見るバードの道」について、話をさせていただきます。

図9 バードの足跡

バードは函館に着いた後、森町から室蘭まで船に乗って、白老、最終目的地のアイヌ集落のあった平取を目指しました（図９）。８月のすごくいい時期に来たためか、北海道についてはかなり良く書いています。

私が「地理情報システム」（GIS）を使い、バードが辿ったルートを再現してみたところ、割と平らなところを通っています。バードが歩いた全行程は２千km以上ですが、北海道だけで４分の１ぐらいの570kmを歩いています。

ここで私とバードの関りをお話しします。1999年に金坂清則先生が、北海道新聞に書いた「平取に至る道筋を復元」の中に、平取町役場の寺嶋邦郎さんの指摘で、バードの道は去瑠太から去場まで、沙流川沿いの左岸を通る道で、1896年（明治29）製版の５万分の１地形図に表されているということが書いてあり、私は「バードの道を復元できる」と思いました。

その後７～８年経ったころ、平取町出身の学生が私の研究室に入ってきて、歩いて自然や歴史を楽しむフットパスルート作りをふるさとでやりたいということで、バードの道の復元を2006年から始めました。

寺嶋さんが指摘する地図は、国土地理院の前身の陸地測量部の地図ですが、当時まだ自然がそのまま残っている状況でした。大正時代の1919年の地図では水田や道が結構できていて、バードが通ったであろう道は寸断されていました。さらに1958年、1977年、2000年というように、バードの通った道を地図の上で復元しました。

その結果、バードの道が町道や国道になったり、消失していることがわかりました。それを北海道大学植物園園長だった

故辻井達一先生に話したら、それは面白い、環境保全と観光を両立させたエコツアーやフットパスをやろうとなり、「バードの道を辿る会」が2007年に出来ました。

バードの会では、フットパスツアーを地元の旅行会社と実施したり、函館とその近くの大野、室蘭、白老、平取にバードの説明板を設置しました。

私がどの様にして地図を作ったかですが、地図を重ね合わせたものからいろんな環境の解析やドローンを使って地図をつくるのが私の専門です。昔の地図は測量が甘く、地図の四隅にある緯度・経度が、今の地図と合いません。そこで、地図の中の神社や学校、道路の交差点など位置が変わってないところを見つけて、ずらしながら今の地図の上に載せます。

最終的に昔は大体が一本道なので「バードは多分ここを歩いただろう」ということや、バードが記述している景観とかを探し「多分これだろう」と推測して、ルートの確定をした「今昔マップ」（図10）をホームページに情報を公開しています。更に、奥地紀行からのコメントをクリックで見られるもの（図11）をつくったりしています。

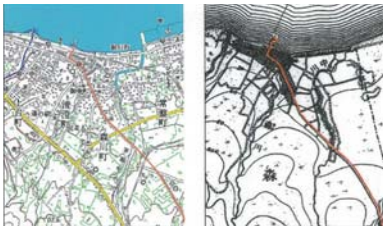


図10 森町今昔マップ（例）

また今開発しているのが、衛星画像から昔の写真はどこから撮ったのかを見つけ出して、同じ場所から今の写真を撮影することもやっています。

図11 ストーリーマップ（例）

大友　金子さんのバードのルートで行くと、北海道駒ヶ岳を越えるあたりがちょっと険しいぐらいでしょうか。

金子　行きはたいしたことないですが、帰りは船に乗らないで、室蘭から噴火湾沿岸の礼文華（れぶんげ）という山道を通りますが、とんでもないところです。ある人の本を読むと、バードが通ったルートで最難所だったかも知れないと書いていました。

バードの足跡から地質学的観点からの景観

大友　私の専門である地質学的なところから読み取って紹介します。

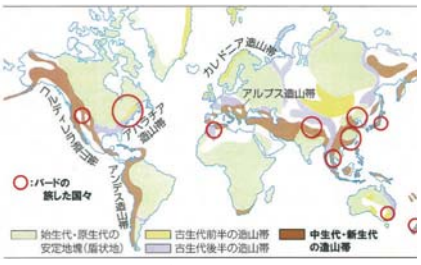


図12　バードの旅した国々

バードは20歳代に北米の東海岸、30歳代にはカナダやオーストラリア、ニュージーランドに行き、ロッキー山脈の旅をしてから日本に来ました。その後、朝鮮からロシア、中国に行き、さらにマレー半島、インド、チベット、ペルシャや、アトラス山脈、モロッコなどにも行っています（図12）。

その足跡を地図で見ると、造山帯と呼ばれているところで、造山帯は地殻変動が激しく、複雑な地質構造で、幅狭く高い山が分布しているところとなります。私の感覚ではロッキー山脈以降、バードは味をしめてこういう造山帯を選んで旅行をしているようにしか見えません。

それから金山三山です。バードは「ピラミッド型の丘陵が半円を描いており、その山頂まで杉の林で覆われている」と記載しています。

地質学的には、アジア大陸から日本列島が分かれて、その間に深い海が広がったのが日本海ですが、その海に泥が溜まります。約1500万年前、この金山層という海の泥の中に安山岩のマグマが貫入して来ます。その後、現在の地形ラインまで柔らかい部分は浸食が進みますが、岩脈は固いので山として残りました（図13）。心象風景とは逆に、地質学の目で見た一つの例です。

図13　金山三山の地質

今年の９月に北海道で大きな地震があり、石狩低地帯の支笏火山噴出物が厚く積もっていた山が崩れ、被害が起きました。これを地質図で見ると、13万年前頃から洞爺火山、クッタラ火山、支笏火山が連続して噴火したところです。奥地紀行には「室蘭から佐瑠太まで、いたるところに新旧の火山活動の痕跡がある。軽石、石灰華、礫岩、時には硬い玄武岩の鉱床があり、白老から東方の地域全てを最近の軽石が覆っている」と記載されています。実際は玄武岩ではないのですが、バードは見てないようで結構見ているなと感じました。

まとめ

大友　最後に３人からまとめをお願いします。

川上　今回のため写真を撮りに駆けずり回りましたが、普段はなかなか水辺に近づくことがありません。やはり高い場所から見るのと、実際に船で通って見たであろう景観は、かなり違うということがわかりました。

阿賀野川沿いではまだ、バードについての調査が不十分な部分がたくさんあります。これからそういったものをどのように受け止めていくか、考えていきたいと思っています。

八木　ちょっとポジティブな表現をしますと、良いタイミングで置賜地方に入って来たと思います。一方、日光から会津田島までの悲惨な表現には、その地域の人に申し訳ないなという思いがしています。

金子　140年前に、外国の女性が一人で北海道まで来たというだけでもすごいのですけども、当時の北海道には、アイヌと和人と西洋人が結構住んでいました。平取にも何人かいて、バードはその人たちを訪ねて行きました。単純に秘境のアイヌ人を見に行くだけじゃなく、すでに住んでいる人たちを訪ねることができるほど、当時の北海道は多様だったと思います。

それから地図を作っていくと、かつては湿原で、それが水田に変わって、そのあとまた湿原に変わったというような場所もあるので、一概に今の景色だけ見て「昔はこうだった」とか、「随分変わった」とか言えないと思います。そのようなことを思うと、140年という年月は結構長いという印象を持ちました。

大友　今日の３人のいろいろ違ったお話から、新しい視点を得ることができました。『日本奥地紀行』を読む時に、いろいろな観点から140年前の日本の様子を考察することがありますが、今と変わらない景観もありながら、人が関わってくるところでは大きな変革が生まれ、それが現在の景観として見られることになります。そういうものを読み取りつつ、改めて『日本奥地紀行』を熟読すると楽しいと思いました。

（文責：事務局）

基調講演

鼎談者
中村 英夫 氏
東京都市大学名誉総長

京都市生まれ。昭和33年東京大学工学部卒業後、帝都高速度交通営団（現東京地下鉄）勤務。昭和41年東京大学生産技術研究所、東京工業大学社会工学科助教授を経て、昭和52東京大学教授、平成8年運輸政策研究所所長、平成16年武蔵工業大学学長、総長。その間、土木学会会長、世界交通学会会長の他、各種審議会委員等を歴任。土木計画の国内第一人者であり、名誉博士（フランス、リヨンリュミエール大）、名誉工学博士（ドイツ、シュツットガルト大）を授与されている。平成12年「アルカディア街道復興シンポジウム」（山形県主催）で基調講演講師も務めている。

鼎談者
舩山 龍二 氏
JTB 相談役／山形市出身

山形市生まれ。山形東高校、東京教育大学（現筑波大学）理学部卒。昭和37年日本交通公社（現JTB）入社。平成8年代表取締役社長、平成14年代表取締役会長、平成20年相談役、現在に至る。社外活動は、国土交通省交通政策審議会委員、観光立国推進有識者懇談会委員、日本ツーリズム産業団体連合会（現日本観光振興協会）会長、日本観光通訳協会会長、日本ワーキングホリデー協会会長、東京観光財団副理事長など多数の公職を務めるかたわら、立教大学特任教授に就任、その他主要大学で出講。現在は、財団法人日本交通公社評議員、運輸総合研究所理事、日本コンベンション協会相談役、山形県観光審議会委員（座長）、山形観光アカデミー学長。

鼎談者
渋谷 光夫 氏
アルカディア街道IB倶楽部会長・東北文教大学客員教授

山形市生まれ。山形大学教育学部卒業後、山形大学附属小学校、山形市教育委員会、村山教育事務所などを経て、山形市立第四小学校長を定年退職。その間山形県社会科研究会長、山形県連合小学校長会長、全国連合小学校長会常任理事などを歴任。その後山形教育用品(株)代表取締役社長、山形大学教職大学院客員教授を経て、現在東北文教大学客員教授、山形市東部公民館長、アルカディア街道IB倶楽部会長。著書に「イザベラ・バードの山形路～アルカディア街道散策のススメ」（無明舎出版）、「ベニちゃんのまるごとやまがた」（共著、山形市）、「『個が育つ』創造」（共著）など。

第1分科会

コーディネーター
宮原 育子 氏
宮城学院女子大学現代ビジネス学部長

東京都生まれ、山形県高畠町在住。旅行会社に11年間勤務した後、昭和64年明治大学文学部史学地理学科に入学し、以降、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程を経て、東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。平成9年宮城大学事業構想学部に着任、平成28年3月まで勤務。宮城大学名誉教授。平成28年4月宮城学院女子大学現代ビジネス学部長、現在に至る。専門は地理学。地域資源の掘り起こしを通じ、地域が取り組むことが可能で持続的な交流型の観光振興について研究。著書：『東日本大震災復興研究Ⅰ～Ⅴ』（共著）,『南三陸・仙台湾地域のジオツアーガイド』（共著）など。とうほく街道会議会長。

アドバイザー
和田 賢哉 氏
山形河川国道事務所長

福岡県生まれ。平成12年早稲田大学卒業、平成14年早稲田大学大学院理工学研究科修了。同年国土交通省入省、九州地方整備局、港湾局、道路局、関東地方整備局、大臣官房、道路局環境安全課企画専門官を経て、平成29年4月より山形河川国道事務所長。同事務所では、一級河川最上川及び一般国道5路線、東北中央自動車道の整備や管理を通じて、県内の産業振興に欠かせない交通基盤の構築、県民生活の安全、安心の確保に取り組んでいる。

パネリスト
申橋 弘之 氏
金谷エンタープライズ(株)代表取締役・金谷ホテル創業者の孫／日光市

東京都生まれ。金谷ホテル創業者の孫として生まれる。早稲田大政経学部を卒業後、三菱電機に勤務しながら金谷ホテルの非常勤取締役を30年間務めた。現在は、金谷ホテルベーカリーと金谷ホテル歴史館（エンタープライズ（株））の社長を務める。社会福祉法人むくどり理事長。とちぎ未来大使。東京栃木県人会理事。著書：『金谷カテッジイン物語　日光金谷ホテル誕生秘話』（2017年）、写真集『侍屋敷』（編集）

パネリスト
古賀 方子 氏
全国街道交流会議専務理事／福岡市

福岡県生まれ。編集者、プランナー業務のかたわら、北部九州地域連携軸構想や長崎県・日蘭交流400 年記念事業の企画に携わる。2002年「全国街道交流会議」設立携わる。「とうほく街道会議」、「飛騨の匠街道推進協議会」、「箱根八里街道観光推進協議会」など、コーディネーターとして各地に街道団体を立上げ、交流・連携型事業を企画・実施するなどの活動支援を行っている。NPO法人全国街道交流会議専務理事、内閣府地域活性化伝道師。

パネリスト
西田　徹 氏
金山町景観政策推進員／山形県

金山町生まれ。昭和53年岩手大学工学部卒業。同年金山町就職、山形県農林水産部出向、土木課・建設課・教育委員会・環境整備課に勤務し、平成28年環境整備課長で退職。その間、「金山町まちなみづくり100年運動」等の景観行政に従事。退職後、山形大学人文学部大学院社会文化システム科に入学し、街道も含めた地域資源の活用策について研究し、平成30年修士課程修了。現在、金山町景観政策推進員（嘱託）、羽州街道交流会幹事。

第2分科会

コーディネーター
藤田 洋治 氏
山形大学地域教育文化学部教授

川西町生まれ。昭和57年筑波大学教育研究科修士課程修了。昭和58年に鶴岡工業高等専門学校に勤務、以降、東京成徳短期大学、大東文化大学を経て、平成27年度 山形大学教育文化学部教授、現在に至る。専門は日本文学で、特に和歌文学を中心に研究。著書に『公忠集全釈』（風間書房）、『合本三十六人集』（三弥井書店）、『国語の授業をつくる 小学校編』（長門出版社）ほか。山形新聞社と共催で、「やましんU39短歌」を担当。この11月には、「やまがた夜話」で「山形県内の八景めぐり」などを講演予定。

パネリスト
秋山 秀一 氏
旅行作家／千葉県鎌ヶ谷市

東京都生まれ。東京教育大学（現・筑波大学）大学院修了後、東京成徳大学教授等を経て取材・執筆に専念。訪れた国と地域は90か所以上。平成21年から3年間、NHKラジオ「旅に出ようよ」にレギュラー出演。「世界旅レポート」、「旅の達人が見た世界観光事情」など。現在、日本外国特派員協会会員、日本エッセイスト・クラブ会員、日本旅行作家協会評議員。著書：『ヨーロッパ観光事情 まち歩きの楽しみ』（新典社）、『大人のまち歩き』（新典社）など。YouTubeで、「旅行作家 秋山秀一の世界旅」配信中。

パネリスト
立松 和宏 氏
『日本奥地紀行』の旅・研究会／千葉県浦安市

名古屋市生まれ。昭和44年名古屋大学経済学部卒業。日立グループ各社に勤務。昭和58年より浦安市在住。平成20年より年金生活者となって以降、読書・旅歩き・映画を趣味に過ごす。大学生時代のワンダーフォーゲル部OBと国内外の山歩き・街道歩きを楽しむ。その一つが、イザベラ・バードの〝日本奥地紀行の道を辿る〟旅。平成22年より〝書く〟ことが始まり、翌々年以降には〝話す〟活動が加わっている。著書：『ザック担いで イザベラ・バードを辿る』(2017年/共著)。

パネリスト
錦　啓 氏
元山形県博物館館長／南陽市

南陽市生まれ。山形大学文理学部国語国文科卒業。昭和42年から平成17年まで山形県立高校に国語科教員として勤務。この間、県立北村山高校校長、県立博物館館長、県立米沢東高校校長を歴任。平成19年から山形県家庭教育アドバイザー。平成24年～平成27年アルカディア街道IB倶楽部会長。著書に『誨えて倦まず』『ここだかなしき』など。現在山形新聞にコラム執筆中。

第3分科会

コーディネーター
大友 幸子 氏
山形大学地域教育文化学部教授

宮城県出身。昭和56年信州大学理学部卒業、昭和60年信州大学理学研究科修士課程修了、平成3年広島大学理学研究科博士課程後期単位取得満期退学。平成8年山形大学教育学部助教授、平成17年同教育学部教授、平成24年同地域教育文化学部教授、現在に至る。専門：地質学。著書：『山形県地質図（10万分の1）説明書』（共著：山形大学出版会、2016年）、『地学ハンドブックシリーズ13新版地質調査法』（共著：地学団体研究会、2001年）ほか。

パネリスト
川上　健 氏
阿賀町観光ガイド／新潟県

新潟県出身。昭和61年新潟大学農学部卒業、新潟県庁入庁。平成20年から4年間地域振興業務に従事。この間、新潟県阿賀町でご当地検定とボランティアガイド養成を支援。また、会津・越後街道の探索と街道再発見イベントを担当。現在：新潟県新潟地域振興局勤務、阿賀町観光ガイド会員、会津街道ファンクラブ事務局。

パネリスト
八木 浩司 氏
山形大学地域教育文化学部教授

兵庫県姫路市出身。昭和54年東北大学理学部卒業。昭和61年東北大学理学研究科博士課程後期修了。昭和61年防衛大学校助手、講師を経て、平成8年山形大学教育学部助教授、平成14年 同教育学部教授、平成17年 同地域教育文化学部教授、現在に至る。専門：地表・地形災害、自然地理学・地形学。著書：『世界地名大辞典』（共著：朝倉書店、2017年）、『地震地すべり』（共著：日本地すべり学会, 2012年』ほか。

パネリスト
金子 正美 氏
イザベラバードの道を辿る会会長／北海道

北海道赤平市生まれ。昭和55年帯広畜産大学卒業、昭和60年北海道大学大学院環境科学研究科修了。平成13年酪農学園大学環境システム学部地域環境学科助教授、平成18年生命環境学科教授、平成25年環境システム学部長、平成23年農食環境学群環境共生学類教授、社会連携センター長、現在に至る。平成19年イザベラバードの道を辿る会会長。専門：環境情報学。著書：『自然環境解析のためのリモートセンシング・GISハンドブック』（共著：古今書院、2007年）ほか。

オープニング

『日本奥地紀行』朗読 【つるおかルネサンスの会】國井美保氏、本間尚子氏

時岡敬子訳『日本紀行』から一部を朗読。
第22信：市野々にて
第23信：小松・東洋のアルカディア
第24信：新しい橋・山形・製糸工場

二日目

11月10日(土) アルカディア街道探訪会

イザベラ・バードの山形県内の足跡を 5 コースに分けて、『日本奥地紀行』の記載ポイントや関連する地域資源をたどりました。

探訪会 A 【黒沢峠コース】[徒歩約3km(峠道)]

〔各コースの⇒はバス移動、～は徒歩〕

【集　合】(10:10) 森のめぐみ直売所駐車場(小国町綱木箱口449-2)
【参加費】 2,000円/人(資料代、ガイド料、保険料、昼食代)
※マイクロバス：小国町

黒沢峠(頂上)

(10:20) 森のめぐみ直売所
⇒ 黒沢峠歩き(市野々口駐車場～頂上～黒沢口・お祭り広場)
⇒ 黒沢公民館(昼食、講話) ⇒ 森のめぐみ直売所：解散 (14:15)

峠に向けて

一里塚跡

楢の木平

黒沢公民館(昼食・講話)

探訪会 B【赤湯～上山コース】[徒歩約2km（街歩き）]

【集　合】（8:20）山形駅西口
【参加費】　1,500円/人（資料代、ガイド料、保険料、昼食代）
※マイクロバス：上山市

ハイジアパーク南陽
「イザベラ・バード記念コーナー」

（8:30）山形駅西口 ⇒ 藩境塚・掛入石
⇒ 赤湯温泉街 ⇒ 烏帽子山公園 ⇒ ハイジアパーク南陽「バード記念コーナー」
⇒ 鳥上坂眺望 ⇒ 眼鏡橋（吉田橋・中山橋・堅磐橋） ⇒ 三本松追分
⇒ 上山市街歩き（昼食、バード記念碑（月岡公園）～武家屋敷～バード宿泊の会津屋跡）
⇒ 山形駅西口：解散（15:00）

上山藩領境界石標・掛入石／上山市

烏帽子山八幡宮石鳥居／南陽市

鳥上坂からの眺望／南陽市

堅盤橋／上山市

昼食／上山市
（クアオルト弁当）

バード記念碑前・上山城（月岡公園）

武家屋敷／上山市

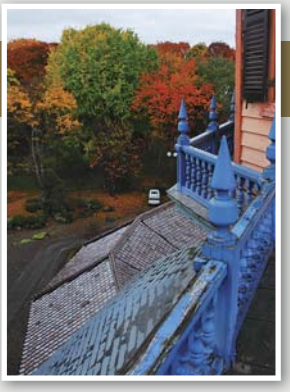
バード宿泊の会津屋跡／上山市

会場の様子

探訪会 C【山形街歩きコース】[徒歩約6km]

【集　合】(8:50)山形駅西口
【参加費】　2,000円/人(資料代、ガイド料、保険料、昼食代)

(9:00) 山形駅西口 ～ 山形市郷土館(旧済生館本館)
～ 市立病院済生館 ～ 御殿堰 ～ 山形市道路元標
～ 湯殿山神社 ～ 文翔館(旧県庁) ～ (昼食) ～ 千歳館 ～ 三島神社
～ 山形県緑町庭園文化学習施設「洗心庵」 ～ 山形県立博物館「教育資料館」 ～ 専称寺
～ 山形大学付属博物館(高橋由一画・長谷川竹葉絵を鑑賞) ～ 解散 (15:00)
(その後有志により) ～もみじ公園(宝幢寺跡)～山形まるごと館「紅の館」


旧済生館本館からの眺め

もみじ公園(宝幢寺跡)

山形駅西口

山形市郷土館(旧済生館本館)

御殿堰

山形市道路元標

文翔館(旧県庁)

山形県立博物館「教育資料館」

専称寺

山形大学附属博物館

街道パネル展、山形県内物産展示・販売 ほか

・『日本奥地紀行』関係:(一財)日本みち研究所、アルカディア街道IB倶楽部
・団体の活動紹介:とうほく街道会議、みやぎ街道交流会、関山街道フォーラム協議会、いわいの里ガイドの会(芭蕉の道・迫街道(上街道)ツアー実行委員会)
越後米沢街道・十三峠交流会
・その他:山形大学地域教育文化学部フィールドプロジェクトE(金山町フィールドワーク概要、羽州街道六田宿見学のまとめ)
山形大学附属博物館(三島県令道路改修画帖展示中の紹介)、山形大学地域教育文化学部藤田研究室(山形縣一覧全圖(明治12年12月作製))
山形河川国道事務所(高規格幹線道路及び地域高規格道路の整備概要)、山形県(やまがた百名山)

探訪会 D【天童～舟形コース】［徒歩約3km（峠道）］

養泉寺／尾花沢市

【集　合】（8:20）山形駅西口
【参加費】　1,500円/人（資料代、ガイド料、保険料、昼食代）
※マイクロバス：東根市

（8:30）山形駅西口 ⇒ 天童公園・バード記念碑
～ 旧東村山郡役所資料館 ⇒ （多嘉橋） ⇒ 神町松並木 ⇒ 東根の大ケヤキ
⇒ 楯岡の切り通し ⇒ （昼食） ⇒ 尾上の松 ⇒ 土生田からの眺望 ⇒ 養泉寺からの眺望
⇒ 猿羽根峠歩き（毒沢～明治新道～一里塚跡・藩境碑～地蔵堂～舟形町民族資料館前）
⇒ 舟形の渡し跡 ⇒ 山形駅西口：解散（16:00）

天童公園・バード記念碑

旧東村山郡役所資料館／天童市

東根の大ケヤキ／東根市

楯岡の切り通し／村山市

地蔵堂前／舟形町

猿羽根峠の明治新道／尾花沢市

一里塚／舟形町

新庄領境界碑／舟形町

［12:00～17:30］　会場：山形テルサ・テルサホール ホワイエ

道の駅
「チェリーランドさがえ」
出店コーナー

探訪会 E【新庄～真室川コース】[徒歩約1.5km]

バード記念碑・金山町

【集　合】①(8:20)山形駅西口　又は②(9:55)新庄駅東口駐車場
【参加費】　2,000円/人(資料代、ガイド料、保険料、昼食代)
※マイクロバス:金山町

(8:30) 山形駅西口 ⇒ (10:00) 新庄駅東口
⇒ 新庄ふるさと歴史センター ⇒ 戸沢家墓所 ⇒ 旧矢作家住宅 ⇒ 上台峠
⇒ 金山街歩き(昼食、大堰公園～バード記念碑～金山住宅街並み) ⇒ 森合峠
⇒ 主寝坂トンネル真室川口～戊辰戦争砲台跡・旧大名道～旧及位集落
⇒ 及位橋(萬代橋跡・明治天皇御休息所碑) ⇒ 雄勝峠口 ⇒ 森合峠
⇒ 金山街内「きごころ橋」 ⇒ 新庄駅東口駐車場(14:30) ⇒ 山形駅西口:解散(16:00)

新庄ふるさと歴史センター

戸沢家墓所／新庄市

旧矢作家住宅／新庄市

上台峠からの眺望／金山町

大堰公園／金山町

昼食／金山町
(イザベラ・バード御膳)

戊辰戦争砲台跡／真室川町

主寝坂からの
旧大名道
／真室川町

万代橋跡・明治天皇御休息所碑
／真室川町

街道談義　[18:30～20:30]　会場:国際ホテル6F・スプレンダー　【参加費】4,000円

木曽根餅つき
保存会さん。

東北各地の地酒で
交流を深めました。